人間の改造

われらいかに生くべきか

ポール・キャンベル
ピーター・ハワード

保存

人間の改造

われらいかに生くべきか

ポール・キャンベル
ピーター・ハワード

相馬雪香訳

毎日新聞社

目

次

一　現代の疑問　七
二　性格の分析　一七
三　解決の鍵　三六
四　力の源　四九
五　人間の改造—実証　五八
六　人間の改造—診断　六七
七　人間の改造—解放　七九

八　人間の改造―決意　八八
九　人間の改造―使命　九一
十　なぜ問題が起るか　九七
十一　一人から百万人へ　一〇五
十二　奇蹟をつくる　一二五
あとがき　一四六

人間の改造

Remaking Men

by Paul Campbell, M. D.
and Peter Howard
Copyright 1954
by Moral Re-Armament
Translated by Yukika Soma
Published by The Mainichi
Newspapers, Tokyo

一　現代の疑問

世の中には、扱いにくい人間がたくさんいる。

彼らをどう取扱えばよいか――それが問題である。

扱いにくい同僚、扱いにくい政治家、扱いにくい子供や妻や夫、扱いにくい民族、階級、国家、こういった問題で何処の国もみな悩まされている。

そしてこのような問題の解決方法が、いろいろこころみられてきた。戦後の国際関係では「拒否権」というものが現われてきた。拒否権は、しかし国連の会議だけでなく通常の会議でも朝の食卓でもよく顔をだすものである。それは行詰りと憎しみを深くするばかりで相手の考え方や性格を変えることはできない。

面と向ってはニコニコしながら、背後から一太刀あびせるというやり方も、私生活や公生活にはよくあることである。そのほかに独裁政治、暗殺、中傷、一時のがれの妥協、強制収容、粛清、しまいには戦争にまで訴えるのである。

事実、近代の歴史は扱いにくい人間に対するいろいろの処理方法の羅列であるといっても過言でない。しかし結論として、どれもが本当に満足すべき解決を与えていない。

ソ連で今日一番悩んでいるのは、新しい社会を運営することのできる新しい型の人間をどうしてつくりだすかということである。共産主義はそれをなしとげていないようである。

ノルウェー共産党の創設に貢献したハンス・ビョクホルトは次のように語っている。「新しい人間づくりということが、今でもソ連の懸案となっている。最近ソ連の会議では『どうしたら新しい人間がつくれるか』が中心議題になっているようである。例えばどんなによい機構をつくってもただ人間を一つの型にはめこむだけでは、それはできない。……新しい質と型の人間をつくらない限り、平和と自由を得ること

はできない」

われわれの大部分は資本家でもないし、また共産主義者でもない。しかし、そのわれわれでも正直なところ、たいがい対立している相手がいるものである。そしてその相手に変ってほしいと思っている。それではなぜその相手と対立するのか。なぜその相手に変ってほしいのかを考えて見ることも無駄ではない。いったい、なぜ相手に変ってもらいたいのであろうか。われわれがよく人を変えようと努力して失敗するのは、そのうらにある動機がまちがっていることが多いからである。

手におえない子供を何とかしたいと思っている親や、厄介な親戚をどうにかしたいと思っている人が多い。しかし、たいがいの場合、それは世間体をよくするために、風波のない、自分に都合のいい家庭生活を望んでいるからである。

経営者は、もっと儲けるために労働者に変ってもらいたいと考えている。

二つの階級が対立して、お互を変えようとして争いあっている。その根本の動機は、一方は自分のもっているものを一物たりとも失うまいとし、他方は持てるものから少しでも多く獲得しようとすることにある。

自由主義国は、相手の独裁主義を攻撃するが、その根本の原因は自分たちが利己的で、怠惰で、安楽な生活をつづけていきたいと思っていることである。

植民地の人びとは、自分たちを搾取する帝国主義者を憎んでいる。もちろん、自由を望んでいるが、復讐も望んでいる。

会議の席上では、みんなが相手側を変えて、自分たちの立場を有利にしたいと考えている。

このようにわれわれは相手を変えようとする行動を正当化するために、平和や平等を守るとか、人権を尊重するとか、愛国心、国家主義、さらには反帝国主義闘争を唱えたり、自由とか正義を闘いとるのだという理屈をつけているが、その実、根本動機は自己本位の御都合主義であることが多い。

つまりわれわれは、自分や自分の属するグループの利益のために相手方を変えたいと望むわけである。逆に自分たち自身にとって不利益にならなければ、かりに相手の性格に間違ったところがあっても、それをほっておくのである。

自分の利益が侵害されたとなるとわれわれはどんなことをしてでも、たとえ暴力に

訴えても相手を変えようとする。

根本的な性質を変えないで、個人や国の行動を無理に変えさせることも可能である。しかしそれは表面的なコソクな手段であって、一時的に力の均衡を変えることはできるかも知れないが時代の動向を変えることはできない。それであるから現代の趨勢は破壊に向って進んでいるのである。

原子力時代の到来は、自然の一番小さな単位である原子をてらしだした。そしてイデオロギー時代は、社会の最小単位である人間をてらしだすこととなった。

ちょうど原子核分裂の知識、技能、原料を最も多くもっている国が、軍事力の競争で第一位を占めるように、人間の性質を変える秘訣と技能をもっている人たちが、この世界を再造するためのイデオロギーの勢力をつくりだす競争に第一位を占めるだろう。

イデオロギーのもつエネルギーは原子のもつエネルギーよりも大きい。なぜなら原子核を分裂させる、その手を動かす頭脳、その頭脳を支配する思想、これが原子力をいつ、どこで使うかを最終的に決定するからである。このことは、われわれが生きて

いる現代の姿を理解する鍵ともなる。現代では国力というものはもはや経済資源、生産能力、及び人的資源だけで計ることはできない。これらの力に勝るものは、浸透力と融合力とをもった思想である。

一つの階級、一つの民族、一つの国の利益のみに限定された思想は、世界を融合するには余りにも小さく、分裂的である。そのような思想は力による強制なしにはその目的を達することができない。

人間そのものの性質を変えるだけの迫力をもった思想だけが、階級、民族、国境を越えて人類を融合することができる。一方の思想は世界を分裂、混乱、独裁、そして戦争への方向に導き、他方は社会的、政治的、経済的ルネッサンス、すなわち人間社会の再出発をもたらすのである。

MRA（道徳再武装運動）の提唱者フランク・ブックマン博士は、新しい型の社会をつくるにふさわしい、新しい型の人間をつくり、かつそれをふやすために、その一生を捧げた。人間を改造する技術こそ、政治家にも一般人にも必要な人生の根本的な技能であると彼は信じていた。すべての人が、この根本的な仕事にたずさわるべきであ

り、またそれができるのである。われわれはみな人の最も深い心の必要をみたす技能を、習得することができるのである。それは決して専門家の仕事ではなく、すべての人は生れながらにして人間の改造の技術者となる力を与えられている。

フランク・ブックマン博士はこういった。「人間性はこれを変えることができる、それが解答の根本である。国家経済のあり方も変えることができる、これが解答の結果である。世界の歴史をも変えることができる、それこそがわれわれの時代の使命である」さらに彼はこういった。「全くあたらしい指導理念が必要である。内閣が人を変えることを知らなければよく国を治めることはできない。たいがいの内閣はこのことを忘れている」

フランク・ブックマン博士のこの努力の成果について、次の二人のひとが適切に評価している。当時フランスの外相であったローベル・シューマン氏は次のようにいった。「MRAが、たんなる理論であるなら私は興味をもたない。MRAは行動にうつされた実践哲学であって、私はそれが何百万の大衆のものになりつつあることを知っている。これは人間社会の世界的な変ぼうであり、しかもすでに開始されているので

ある」

セイロンのアメリカ駐在大使クロード・コリア卿は、一九五三年にワシントンで、著名な外交官や政治家の会合で次のようにのべた。「過去五年間に、二つの偉大な出来事がアジアで起った。それは極東五億の人びとに独立が与えられたことと、ブックマン博士とMRA国際勢力が、数ヵ月にわたってアジアを訪問したことである」

それは二十六ヵ国からなる二百名の人々がブックマン博士とともに、政界、財界、労働組合指導たちの招待で、アジア各国を訪問したことをいっているのである。

東西両陣営とも政治のなか、また国民生活のなかに人間性を造り変える情熱と理論と計画をもたない限り、この時代に対処していくには不十分であることに気がつき始めている。なぜなら人間性こそが、この世界を形造っている素材だからである。それは進歩と繁栄の要因ともなり、また戦争と貧困の原因でもある。それは会議の成功、失敗をも左右する。

いいかえれば人間性は我々が生きている社会のタテ糸、ヨコ糸である。そしてまた新しい社会の原動力でもあるのである。

二十世紀の特質をなす唯物主義のイデオロギーはこの事実をよく知っている。階級とか、民族とかの対立や、複雑な理論を表面に立てて、反感、憎しみ、怖れ、野心、貪欲、肉欲等の人間性を巧みに利用して、全地域の支配網を全世界に確立しようとしている。

自由主義国の中にある弱さや不決断や不一致は、人間の性質を適切に処理する力をもったイデオロギーをもっていないところから来ている。さまざまな主義(イズム)が、改革や革命を主張している時代に、民主主義は、自由、団結、平等などのかけ声によって対抗しているが、それが人びとの日常生活に実践されていないために、昔のような迫力を失ってしまっているのである。

民主主義が他の主義(イズム)にまさる一つの革命勢力とならない限り、人の心をかちとるための思想の戦いに、いつも防禦的な立場におかれることになるだろう。

人と人を融合し、真の自由を与えるような革命は人間の性質を変えることによって生れるのである。それによって政治家の理想も実現され、われわれの待ちのぞんでいる社会の変革も生れるのである。

このような革命こそ、仮借なき血の粛清に対する自由な人間の解答である。それがまた自由陣営に内在する腐敗、分裂、怠惰に対する答ともなるのである。

人間性の形成は、かつては家庭、学校、宗教にまかせられていた。今日ではそれだけでは足りない。正しい生き方を教える方法を知っている家庭はほとんどない。学校は単に技術と学術の訓練をする場所となりさがり、宗教も何百万の大衆と無縁の存在となってしまった。民主主義が間違ったイデオロギーとの競争に破れ、征服されないためには、すべての人びとが新しい生き方を学ばなければならない。政治家も、親たちも、教師も、経営者も、労働者もそして軍隊も、みんながこの新しい生き方を必要としているのである。そうでなければ、この二十世紀は人間の性質を変えなかったばかりに全人類の自滅を記録することになるであろう。

二　性格の分析

十八、九世紀の人々は世界の事象を科学的に理解しようという情熱にとらえられていた。これが理性の時代を生んだ。

二十世紀になって人々がその世界を自ら支配しようという情熱にとらえられることとなり、意志の時代を招来した。カール・マルクスは「哲学者は世界の事象を解明した。われわれの仕事はそれを改革することである」という有名な言葉をもって、新しい時代の到来を宣言した。

現在の世界は、人間の意志を支配しようとする巨大な闘いのまっただ中にある。それは、人間の意志をとらえて、規律のある世界的な革命勢力に広範に動員しようとい

う闘いである。

民主主義は、人間が一群の人たちの奴隷となって、その目的のために利用されるという観念を拒否している。しかし、単に統制をしないというだけでは、強力な全体主義的統制に対する答えにはならない。民主主義はともすれば、それを金科玉条のように思っているが、それは、この世紀の実相に直面しない盲目さの結果である。

世界の将来は人間の意志をとらえ、全人類を一致融合させるような大きな目的に向って、これを動員できるか、どうかにかかっている。それによってのみ、個人や国家を少数者、すなわち、個人、グループ、階級の独裁の脅威から解放することができるのである。

人間の意志は、全面的な要求に喜んで応じようとするものである。すべてを投じたいちずさの中に、はじめて意志は平安を感じる。人がつねに偉大な目的にすべてを投入した時、頭脳は創造的に働くようになり、肉体もまた規律と健康をうけ入れざるを得なくなる。われわれは元来、偉大な人間になるために生まれてきたのである。円熟した豊かな人生をもつためには、われわれは、まずその時代の要求に応ずるだけの目

的をもたねばならない。

昔は芸術、科学、政治、産業等が、人生最大の目的となっていた。しかし、現代では、それらは余りにも小さい。世界は日を追って小さくなって行くが、分裂はますます大きくなって行く。融合の道を見出さない限り、現代の世界は破局に向って進んでいることをわれわれの理性は知っている。だから、このような時代では意志を満足させ得る人生の目的は、世界的な規模と道義的な性格に立脚していなければならない。共産主義は人々にこのような目的を与えてはいない。共産主義は階級意識の上に成り立っている。したがって規模が小さく、また分裂的である。階級闘争の必然的な結果は、二大陣営の原水爆戦争であることを、われわれの理性は感じている。であるから共産主義は、道義的にもイデオロギー的にも、現代人の根本的な要求を満たすことはできない。

一方民主主義も、現状のままでは、その必要を満たしていない。現在いわれている民主主義はその目的が混とんとし、個人に求める責任があまりにも小さい。個人主義と利己主義を認めるばかりでなく、奨励している。その結果、いわゆる「啓発された

利己心」（Enlightened Self-interest）が民主主義の運営と政策の基盤となっている。

そのために不安と焦燥が現代人の精神的特質にすらなってしまった。われわれがいま必要としていることは、道義的変革と、イデオロギー的自覚を通して世界史の中における正しいわれわれの立場を発見することである。人間の性格を詳細に分析することによって、そのことをさらに深く説明したいと思う。

人の生活には三つの領域、すなわち、知性、肉体、意志がある。この一つ一つが性格を形づくっている。しかし、それぞれが、密接にからみあっているので、人間の行動をさして、「これは知性、これは肉体、これは意志による行動である」と区別するのはむずかしい。しかし、そうした分析を一応してみることによって、人間性の構造を詳細に知ることができる。

それをもとにして、われわれの行動の原因となる力が何であるか、そしてその力をどうしたら変えることができるのか、そういったことを考えて見たいと思う。

実際の生活は完全でなくとも、考え方だけは健全だと思っている者が多い。つまり、何が正しいかは分っているが、実行しないだけだというわけである。ところが実

際には、生活に妥協がある時には、考え方も混乱しているものなのである。われわれの知性はすばらしい機能をもっている。しかし、つねに肉体と意志の力に影響されている。曲った生活をしながら、正しい考えをもつことは出来ない。「純粋理性」というものは、日常生活ではめったに見られない。人間の性格の構成がそれを許さないのである。

われわれはしばしば自分は実際よりも善良で、賢明であると思いがちである。高遠な哲理を語りながら、低級な生活をし、善意をもちつつ、悪い結果をまねくような行動をしている。われわれが考えている自分というものには三つの姿がある。一つは自分の見た自分である。すなわち理想と野心ででっちあげ、実際の行為とは関係なく、想像している自分である。第二は友人たちや他人から見た自分、これも同じように実際の姿とは、かけはなれたものであるかも知れない。第三には、本当の自分である。すなわち、うぬぼれ、野心、自堕落、感情、誘惑などを具えた、あるがままの姿である。

自分の姿について、あやまった観念をもっている時には、まわりの世界について

も、あやまった考えしかもてない。うぬぼれをもった親は、子供のあるがままの姿をはっきりと見ることができない。同じ企業に対して労使の見解が、全く相反する場合が往々にしてある。自分の国のあり方に関しても、人びとの考えは同じように混乱している。それはわれわれ自身の中に働きかけてくるいろいろな力をはっきり見て知っていないために、国のあり方をつくり出しているいろいろな力に対しても盲目となるからである。他国のものが、われわれの国を本当のところどう思っているかを知っておどろいたり、傷つけられたり、憤慨したりする。そして相手の見方がまちがっていると思いこむ。そしてさらに相手を盛んに攻撃しながら、実は自分もそれと知らずに同じことをやっていることが多い。これが人間関係をますます混乱させる。相手を利己主義だといって責めたてるが、実は自分の利己的な欲望を邪魔だてされる場合が多い。こんなふうにして人間は、独善のかべを張りめぐらし、非現実な世界に逃げこんで、すべての人に対して、狭量で、優越的な立場から非難するようになる。ついには、みんなが自分のようにさえなれば、万事うまく行くという喜劇的な確信を持つようになる。

こういうふうだから、政党、階級、民族、国家等が個人の場合と同様に、ますます分裂していくのは当然である。それであるから、間ちがった哲学や世直しの万能薬の如き思想が横行するわけである。世の中がわれわれの思うようにいかないのは当然のことといわねばならない。

次にわれわれの肉体について考えてみよう。

医学界は近来肺臓ガンの急増を盛んに問題にしている。実験の結果、これは喫煙の非常な増加と密接な関係があるように考えられてきた。喫煙は血液の循環にも悪影響があることは、すでに明らかである。多数の人びとが、「何だって煙草をやめる必要があるんだ」というが、その前に一体「なぜこんなものを吸っているんだ」ということを考えてみることがもっと適切ではなかろうか。

アルコールについても同じことがいえよう。アルコール中毒患者が、国家にとってどれほどの負担となっているかは、よく知られている。フランスでは、酒毒から起る肝臓病と精神機能障害が、国家的大問題となっている。事実、医学的には、習慣的に少しずつ飲む方が、ときどきひどく飲むより悪いということも証明されている。

つき合い上やむを得ないからとか、すすめられて断わりにくいからとか、或いは悩みを忘れるためとか、いろいろな理由で人びとは酒を飲む。そして大ていの人は、煙草でも、酒でもやめようと思えば、いつでもやめられると思っている。しかし一方、多くの人が、こういった習慣のどろ沼にあって、それから自由になるためならば、自分の腕をきりはなしてもよいと思うほど苦しんでいることも事実である。ある牧師が医者の忠告もあるのになぜ「かみたばこ」をやめないかときかれたとき、「どうしてもやめられないのだ」と答えたという。これはわれわれの多くに当てはまることである。

もう一つの問題は他人の道義的欠陥をどうしたら助けることができるかということである。個人の場合でも、国家の場合でも、まず自分の道義的な欠陥をなおさない限り、相手の欠陥に手をつけることはできないのは当然である。自分の良心に妥協している時は、他人の心の必要に対しても非常に冷淡になるものである。小さな悪徳とわれわれが呼んでいるものの中から、人の心の深い必要を満たす力が洩れてしまうものである。

政治家や責任ある人の場合には、彼らの「小さな悪徳」は国民全体に負担を負わせることになる。そのような人は、彼らの同僚や友人、或いは反対党の人の中にある道義的な問題を助けることができない。その結果は、新味のない陳腐な国内政策、外交政策となって表われるのである。

親子の場合も、親が自分の欲望に対して正しい解決をもっていないと、子供たちがその犠牲となる。青年たちが低級な娯楽、麻薬、性的刺激を求める習癖に溺れていくのは、生活の空虚さを満たそうとする空しいこころみである。そのような空虚さは生きる意義を失った人生、そしてすべてを投じて悔いない目標をもたないことの結果である。親が子供たちに大きな目標と充実した人生を与えることができないのは彼らの生活のなかの妥協によるものである。

大たい頭では正しい方向を知っているものであるが、肉体の欲望と自我が相まって、理性が征服されてしまうものである。ところが意志のなかに変化が起ると、それまで性（セックス）とか、煙草、アルコールとか、麻薬とかに求めていた刺激や逃避が不必要になる。前にはそれなしでは生きる楽しみがなくなってしまうと思った習癖も、急にそ

の魅力を失ない、健全さがもどってくる。

われわれの精神生活と肉体の生活が正気にもどるには、われわれの内部で支配力をにぎっているものに革命的な変化が起らねばならない。人間生活の中核、自己の本質、すなわち人間の行動の源となるものは、その意志である。その意志を中心として、愛、憎しみ、自負心（プライド）、貪欲、怖れなどの感情が衛星のように並んで、われわれの心の宇宙体を形づくっている。太陽がちょうど衛星の運行を支配しているように、この意志がわれわれの考え方や生き方に対して決定的な影響を与えている。だから人間の意志をあくまでも変えようとする闘いこそ、世界のあり方を変えようとする闘いの根本をなしているのである。

意志は本来強大な力をもっている。弱い意志などというものはあり得ない。よく自分の意志が弱いから誘惑にまけたというが、実際には、結果の如何や、ことの善悪にかかわらず、自分のしたいことをするのだから、意志の強さを示しているといってよい。やりかけた仕事を続けてやり通すことのできない人は意志の力がないと非難されるが、実際には周囲の事情にお構いなく、自分の気分まかせに行動するというわけ

で、むしろ強力な意志力の表現にほかならないのである。

人間の意志は、欲求という形をとって現われる。われわれの内部に起る欲求というものは、すべて意志のしからしむるところである。数々の欲求の中で最も根本的なものは、性欲、保身欲、成功欲の三つである。そしてこの三つがたがいに制御しあっているのである。たとえば性欲を無制限に満足させようとすれば、自己の保身、成功がおびやかされるので、これが制約される。成功欲は、保身の必要上、制限されざるを得ない。なぜなら成功のためにみちを選ばなければ、当然社会の掣肘をうけるからである。そこで意志はこうした制約の間を縫ってなんとか本来の欲求を満たすためにありとあらゆる巧妙でずるい方法を考えだすものである。

意志が、性欲を通じて人間の生活のあり方に影響し、またこれを支配しているいろいろの姿を考えてみよう。たとえば男女と浮気というものがある。これは本来、相手に対しての思いやりとは関係のないものである。お互いに目を交わし合ったり、手をにぎったり、相手を手に入れてみようと考えたりするが、もともと相手の最善を考えるというような思いやりは、塵ほどもない。しかし、それによって一日の時間、行

動、金のつかい方まできめられる。外部にそういった浮いた興味をもっている限り、家庭や職務に対する責任が必ずおろそかになる。男性はしばしば魅惑的な女性のまわりに集っていく。その行為自体がその人の本来の人間関係や責任に対する驚くべき無関心の表現であり、相手の女性の利益をも全く考えていないことである。

商売人はぬけ目なく、この点を利用し、自動車や煙草、映画から新聞の挿絵にいたるまで、これを使う。多くの画報や評判の小説などで、セックスを主題としているために人気のあるものが多い。

同性愛は男女ともに、支配しようとするものと、支配されたいと思うもののあいだに起る。政治、社会、文化、教養等のあらゆる領域を通じて妙な結びつきの起るうらには往々にしてこれがある。他の同性に対して、感傷的な関係を結ぶ人は、その人との間に、職務とか、国への忠誠をさえ平気で無視させるような、固いきずなをつくる。各国の政府の役人の間に、外国の手先が同性愛の癖のある仲間をろうらくして浸透した例はいくらもある。同性愛の連中をみつけだして、追放することは、共産主義者を投獄するのと同様に効果がうすい。役所の部長、課長、学校の校長、軍の将校た

ちが、人を変える方法を学ばない限り、どんなやり方も、問題の中心をつくことはできない。彼らは非常に広範囲にわたって行なわれている危険な問題を処理することができない。

今日、政治家や実業家のあいだでは、女性と不倫な関係を結ぶことが、普通のこととされているが、自己のそうした欲望に対して「否」といえない指導者たちが、いくら国民にむかって生産とか、団結とか、犠牲とか言ったところで、国民は「諾」といって答えまい。個人の私生活の敗北は、公の指導面に全面的に反映するものである。この点を無視するのは、人間生活の真相に目をつぶることにほかならない。

さらに、男女を問わず「秘密な」、「ひそかな」性的な習慣がひろく行なわれている。近年ではその習慣は自然で、無害な、また必要なものであるとさえ青年たちが教えこまれている。沈黙と孤独、憂うつさと罪悪感、劣等感やしゅう恥心、内気とか、自己中心の態度というものが、この習慣にとらわれた人びとの特徴であって、これらの状態はどんなに弁明してみても自然で無害なものであるとはいわれない。この習慣は自己愛の現われであるが、それに対して簡単な、しかも実際的な解決の道がある。

そしてそれから自由になると人びとは、静かな落ちつきと内的な明るさと平和、開放的な無私の態度をもつことができ、前者と比較のできないものがある。

意志の第二の大きな要求は、保身、すなわち自己の保全のためのものである。これは金銭や物質的なものに対する人間の態度に現われる。つまり資本や利潤や所得や賃金等に対する所有欲がそれである。しかし実際には人は持てば持つほど、不安も増すという矛盾がある。持てば持つだけ、もっとほしくなるものである。所有がふえることによって安全保身の欲望を満足させられるのならば、所有欲がとまるはずである。しかし事実はその反対である。意志は元来合理的ではなく、全力をあげて満足を求めるものであって、しかも本当の満足のないものに向ってつきすすむものである。金銭が人生の目的そのものになる場合があるが、そうなると、それは個人と国家の生活を麻痺させ、片輪にしてしまう。これが公生活での腐敗の根源なのだ。だから人間の保身欲にメスを加えない限り、いくら政治的、経済的、また法律的な方法をとっても、その根本的な解決はできない。

他人によく思われたいという意志もまた保身の表われである。これが学生たちにカ

ンニングをやらせる。そして大人になると収入以上の生活をさせるようになる。子供に知らせない秘密をもつ両親をつくり、子供も一番彼らの困っている問題を両親にうちあけようとしない。そのために問題が表面にでれば解決できる場合にも、いつまでもでてこないのである。

同じことが、民主主義の組織をむしばませる。普通の政治家は何が正しいかということを土台とした確信を選挙民に与えるかわりに、選挙民のよろこびそうなものを与えようとする。国全体の利益は、第二として、投票の集まるように専門の計略家がたてた政策だけをかかげていく。もちろん除外例はある。しかしそれは除外例であって、民主主義では多数者が決定するのである。

また意志は計画をたてて、その中に安心を求める。もちろん、人間の生活と社会を秩序正しく運営するために計画は必要である。

しかし、時として計画は、将来を支配することによる安全保身の欲望の表われである場合もある。その計画に、どれだけ自己の安全保身をかけているかどうかを知るよい道は、その計画を変えるようにいわれたときの態度でわかる。われわれは、自分の

気に入った計画は、公的なものであろうと、私的なものであろうと、むやみにそれを固守しようとする。

また自分がいつも正しいのだということに安全を求める。これがわれわれの大部分にとって偶像になっている。いつも自分が正しいといいはる人は、孤独な不人気な人間であるということを忘れがちである。自分について正直な人こそが批評家を味方にし、友人をかちうる人である。最近現われる伝記や自伝をみて驚くことは、指導的地位にある人が誰一人まちがいをしたことのないようにみえることだ。

自分が正しいと主張する熱意は、同時に失敗をしては大変だという恐れをそのかげにもっている。この気持は、いつも事態が悪くなってくると、きまって相手をせめる態度となって現われる。人と人との間でも、国と国との間でも、相手を批判ばかりして、お互いに自分を変えようとしないのも、このためである。

成功の追求は、意志の第三の大きな活動分野である。大体の人は自分のやりとげたことを他と比較してみたがる。その成功の標準はたいてい、みなりのよい妻、尊敬される地位、美しい住宅、社会での評判等である。

成功欲にとらわれた人は、相手に対し、ことに競争相手に対して、その地位とか、人気とか、権力とかを批判する。自分が成功しているようにみせるよい方法の一つは、相手の成功が比較的重要でないとみせかけることだ。ある程度称賛しながら、一方では、相手の欠陥を機会のある度に暴露する。なるほど、それは相手の欠陥を暴露するであろうが、同時に自分のなかにある野心や嫉妬心をも暴露する。

意志は成功するために『自分の力量と判断力は正しい』という評判をきずこうとする。ある大銀行の頭取が正直を実行するようになって、はじめてみとめたことは、財政顧問としての腕を信用させるために、おとくいの投資の損失を自分で償っていた事実であった。よい評判をえたいという欲望は、ゴルフ場から総理大臣室まで、あらゆる場所で人びとをかりたてる。それがほんとうのことを知られやしないかという恐れと緊張をつくりだす。家庭でも、産業界でも、政界でも、事態の真相を容易に知ることができないのはそのためである。

さらに社会に大きな影響を及ぼすのは、成功欲にかられた人間が、自分で手ぎわよくやれること以外には責任をとりたがらないという事実である。失敗の度合が絶対に

少なく、功績をみとめられる率の多いことだけをやるようになる。

ここに民主主義のアキレス腱――社会全体の福利に対して大多数が無関心となるという弱点が存在する。その最も盲目な人びとは、おのおのの専門、それが産業であれ、科学であれ、芸術であれ、政治であれ、その中だけで立派に成功している人びとの間にとくに多い。そのような人びとは口では強く民主主義を主張するが、家庭や職場では独裁者である場合が多い。税金を払い、選挙で国会に議員を出せば、国家に対する責任を果たしたと思い、それで自分は小さい目前の利益に没頭してもよいと思うのである。このようにして、少数者が支配し、手段を選ばぬ人間が上に立つことも可能となる。民主主義は独裁者の手によって抹殺される前に、民主主義者の心のなかで死んでいく。

近代社会のもう一つの弱点は、産業と政治の世界で成功と正直とが両立しないという考え方である。そのようなドグマが、人びとをそうした考え方にとびこませ、ただ単に、社会的、政治的、経済的、道義的に正しくない行為を黙認するのみでなく、それを利用しようとさえするのである。

だからこそ、現代社会の不正義をなおすためには、端的には大衆が「力のみ」と感じるのは無理ならぬことである。

成功しようと夢中になっている人間はすぐわかる。いつでも一人で仕事をして、その功績を独占しようとする。友人の意向を聞くことは、自分で全部のことを知っていないということを是認することになって、自尊心をきずつけられるので、友人達に相談をもちかけない。だからチームワークなどは、自分の弱さを暴露するくらいにしか考えない。こういう人間は、彼自らが、自己の意志の奴隷となっているのだ。

意志は、頭脳と神経系統に例えられる。性、保身、成功への欲望は、両手、両足およびからだ全体に相当するものであって、意志に道義的、思想的な変化が起らない限り、これらのものを通して表現する以外に道がないのである。

三　解決の鍵

どうしたら、この複雑な機構をもった人間の性格を変えることができるだろうか。

この問題の本質は、如何に人の意志を革命化するかということに帰結する。意志は必ず存在する。これなくしては人間の性格は崩壊する。暴虐な肉体的、心理的拷問によって精神的に破壊された人間は、このことを証明している。その犠牲者は他の人の考えや示唆に完全に左右されるようになる。しかし、外部の圧力に対して意志が如何に抵抗するかは、この暴虐的なやり方が極めて強い力と長い時間を必要とすることによってわかる。

われわれに行動をおこさせる力が何であるかを理解することと、その力を変えるこ

ととは別である。われわれ自身が病気にかかっていては、それをなおすことはできない。問題をよく理解したり、対策の必要があることがはっきりわかっても、それだけでは人間の性格を変えるには不十分であることは既にのべた。意志が圧力に順応することはあるが、これを変えるのは道徳的な決意だけである。人びとは相対的な道徳標準を歓迎する。しかし、必要なのは絶対的な道徳標準なのである。相対的な道徳標準は意志の要求に屈してしまう。絶対的な道徳標準は意志を断ち切って、変化を要求する。

変わることへの抵抗は必ずある。人の意志の周囲には自負心、怖れ、野心、欲望、要求といったものが、玉ねぎの皮のようにグルグルと取りまいて、変わることをさまたげている。変わることが必要であることをほのめかされると、たいていのものは直ちに反抗する。変わらなければならないことを指摘されると、相手を非難し反発する。反発の度合は、われわれの良心が刺激される度合に比例する。事実そうした非難は日常のこととなっている。二日酔いの夫は、とかく朝食のコーヒーに文句をつける。政治家たちは、政策のあやまちを指摘されまいとして相手の政党や他の国を攻撃する。

そのような非難は自分たちの中にある敗北を、そのまま相手に投げつけようとするにすぎない。

非難をすることは、意志がもっている攻撃用の武器である。自負心(プライド)はデリケートな神経をもち、恐しい力をもったものであって、自我は多くの場合そのかげにかくれている。自負心(プライド)は、うぬぼれをあらゆる方法できずきあげ、失敗を認めまいとして城塞(とりで)をたかくつくりあげてしまう。自負心は性格の中核をとりまく固い城塞である。

われわれの自我を中心とした生活が、如何に他人に犠牲を強いているかに気づいたとき、自負心は崩れ去る。自己の姿を正直にみつめるとき、相手への非難は消えてしまう。

朝鮮、インドシナ、マライ等の紛争について、ソ連を非難するのはたやすい。しかし事実を正直にみとめれば、社会の不正義を正さなかったことが共産主義を生み、そして今日、われわれが当然の代価を払わせられていることがわかる。

第一次、第二次世界大戦の間のドイツについて考えてみよう。西欧の国々が少しでも思いやり、正直、無私というデモクラシーの伝統を実践していたならば、ドイツ人

はヒットラーにたよって国を救おうという気にはならなかったであろう。

またアジアの国々の経済的、政治的、社会的問題も、過去数世紀に西欧の国々に大きな責任があるといえる。西欧が変わり、その償いをとうにしておかなければならなかったのである。同時にアジアの国々の生活を悩ましているのは分裂、偏見、汚職等であって、現在の、その国々の指導層がそれに解決を与えなければならない。それによってのみ、国の主要問題を解決することができるのである。

個人についても、国についても、変化をさせようとする場合に必要なのは、純粋な同情と思いやりとである。そのためには他の階級、民族、国などに対する無関心、冷淡さ、憎しみなどをまず自ら改めてかかることである。

自分を変え、また他の人をも変えられるような人のみが、国の問題を解決することができる。ちょうど人の生命を救う外科手術が、人体解剖学の講義と異なるように、人を変えることは説教したり、道義を説くこととまったくちがうものなのである。この秘訣を体得した人は、あらゆる事態を捉えて、人と社会を改造する機会にする。世の中の不正、不義、不道徳を見て憎しみを持つかわりにこれを変えようと思う。共産

主義に対しても、単にそれを非難し、自分は勝手気ままな生活を続けるのではなく、共産主義よりもすぐれた信念を持ち、それを生きようと考える。

何が正しいかを知り、偉大な道徳的伝統を誇ることは決して、何が正しいかを実行する代用とはならない。

理想をもつだけで実践していなければ、個人も、国も、常に直面する憎しみ、分裂、貪欲という現実に打ち勝っていくことはできない。理想主義はわれわれを現実の姿よりも、賢明善良な人間であるかのように、錯覚を起させる。とかく自分についてはその理想をたてとして寛容であり、相手については、その行動だけで批判したがる。公言はするが実践をしない道徳の原則は、実際にはわれわれの感覚をにぶらせる阿片にすぎない。独善的になるばかりで、敗北のままに終ってしまう。

だからこそ、正直、純潔、無私、愛の絶対的な道徳標準に直面して、自己の姿をありのままにみて変わらなければならない点を知る必要がある。

正直

他の人ぐらいに正直になるということと、絶対正直というものに面と向うこととは、まったく違う。鉛筆と紙をもって絶対正直で自分を十分間てらしてみれば、過去の生活がはっきりとわかり、誤ちをなおすために、どこを、どう変えたらよいかがわかってくる。自分の力で償うことのできないこともあろう。しかし、いくつかのことのなかには、昨日のことで今日なおせることもあるであろう。そこから出発すればよい。人間のありきたりとして、とかくできないことの方に気をとられて、できることをあとまわしにしがちである。

純潔

たくさんの人びとは、今日、いろいろな不純潔からくる興奮と陰うつの両極端を往来している。しかし、だんだんと多くの人が、絶対純潔の標準を受入れることのスリルとそれによる心の平和と力を知るようになってきた。男でも女でも不純潔は、それ

が自己の肉体に対する弄びであろうと、異性との放縦な関係であろうと、同性愛、その他変態性であろうと、それは自己中心と心の未成熟さの証拠である。

放逸な夫婦生活は、法的には問題にならないと思われても、おこりっぽい性質の原因となり、子供たちの真の問題にも解答を与えることができなくなってしまう。放逸な結婚生活をいとなむ親たちの子供が、結婚前に不純な関係をもつようになっても不思議ではない。本来、国をも作りかえるべき偉大な結合単位である夫婦関係もそれでは軟弱で感激のない交わりでしかなくなってしまう。

完全な愛は怖れを追い出し、また利己主義を追い出すことによって、不純潔をも追い出すことになる。世界の改造のために生きるようになるとき、人びとは悪をしめだす新しい愛情の力を感じはじめる。激情をいやすには情熱を必要とする。

近代生活には、性欲を故意に刺激するものが多い。自己の慾望の絆から自由になりかけている人びとへの、簡単な手助けを二、三のべよう。崖から落ちる危険があるのを知りながら、なぜ崖ぶちをあるくのか。本とか、画とか、連想とか、避ける必要のあるものは自分でよくわかるはずだ。これを避けたからといって別に芸術的な損害に

ならない。かえって、その人に力が与えられる。堤防の一角に弱い個所を残しておけば、低地が全部氾濫するおそれがある。敗北の段階は、見ること、思うこと、うっとりとすること、そして最後に、おち込むことである。その段階をとめる最善の道は、第一段の見ることで止めてしまうことだ。まちがったものを見なければ、正しいことを考える機会が多いはずだ。「思いは行動となって現われ、行動は習慣を生み、習慣は品性を作り、品性は運命を決定する」

無私

誰もが利己的であるから、利己心をもつのは当然だというかも知れないが、だからといって利己心が必要であるということにはならない。利己心がどれほど悪を生み出しているかを考えると、決して個人にとっても、社会にとっても、有益なものでないことがわかる。実際、自己中心の度がすぎた人間は、精神病院に隔離しなければならない。しかし、これが国となるといかに自己中心的であってもどうすることもできないのが現状である。ごく普通の人間が、自分よりもまず相手のことをいつも考えるよ

うになることができるだろうか。相手を偉大にするために生きることができるだろうか。自分の利益よりも人びとの福祉を心から考えられるだろうか。まじめに、そしてはっきりと他の階級、他の民族、他の国の必要や感情を自分のもののように考えられるだろうか。人は党派、階級、人種、意見、国家的利益を越えて生きることができるだろうか。それができるという答えが出るならば、全人類を一つに結ぶ新しい世界秩序と人生観が可能になる。そうでないならば、われわれの前途は暗く、混乱、分裂、統制、独裁、崩壊以外にない。どんなに立派な組織をつくっても、人間の利己心を変えることはできないことを歴史は教えている。逆に人間の利己心が制度を変えてしまうのである。

フランク・ブックマンは、普通の人びとが悩まされる心配や気苦労から自由で、かつ、他の人びとの必要と福祉について、普通以上に敏感なのは、どうしてかときかれたとき、次のように答えた。「わたくしは、かつて自分のことを二度と考えまいと決心した」そのような決心で生きぬくには、毎日われわれの失敗について徹底的に正直になって、保身欲、性欲、成功欲の要求が、自己中心の考えにわれわれを誘うたび

に、それをはっきりと変えていく固い決意がなければならない。そのような決意から、人に対する思いやりというものが生まれてくる。それのみが自己を愛したいという磁力からのがれるただ一つの力である。

われわれのなかには、変わりたいと思う者がいるであろう。それは必要なことである。また他の者を変えることを学びたいと思う者もいるであろう。それも良いことである。その次にわれわれは、崩壊に向っている文明を救いたいと思うであろう。そしてそのためには当然何百万の大衆にひろめなければならない。人びとに対して成熟した思いやりをもつと、人の心と頭はごく自然にこの順序に動いて行く。

愛

われわれの多くは、特定の少数の人に対しては、継続的な、そしてある程度、無私の愛をもっている。その反対にたくさんの人びとに対しては、なかには全然会ったこともない人にまで反感や、冷淡な気持、優越感、悪感情そして徹底的な憎しみさえもっている。また宣伝の結果、一つの階級や民族、国が、その総力をあげて他の階級、

民族、国家を破壊するため動員されている。愛の反対は、必ずしも憎しみではなく無関心さである場合もある。ある百姓のおかみさんがいった。「わたしは誰も憎んではいない。ただ隣り近所とはつきあわないだけだよ」

絶対愛というのは、人に対して建設的な態度をもつことである。このことは、誤ったことをする人に対して、骨抜きな、宗教じみた、幼稚な態度をとることではない。そうした態度は、個人にとっても国家にとっても、一時のがれのびほう策でしかない。それは危険に対する無気力な態度を助長し、間違った勢力をばっこさせるだけである。

絶対愛は、悪に対して単なる平和主義をとなえることではない。あらゆる道徳勢力を動かして個人、階級、民族、国家をも変えようとする戦闘的な決意を意味する。そして、すべてを投じて世界を再建しようとする、清潔で、強固な、ダイナミックな闘いである。ある妻が夫にいった。「わたくしは、あるがままのあなたを愛しています。しかし、あなたが本当の使命を生きるようになるために闘います」

恨みは最も恐しい力であるが、多くの場合は、あまりにもそれが正当なもののよう

にみえるので、そのまま放置されている。しかし恨みを持つことは、たとえ不正を憎むためであっても、それを正当づけることはできない。黒人の偉大な指導者であったブッカー・ワシントンは次のようにいっている。「相手がどんなことをしても、その人を憎むほど自分は堕落したくない」

あるワシントンの役人は「わが生涯最大の憤り」といって、上役にいだいていた態度を説明した。彼が省内で努力したことを上役に全部無駄にされてしまったのである。だが自分の憎しみのうらには、独善とうぬぼれがあったことを知ったとき、上役にあやまった。それ以来、彼は省内に分裂をおこす代りに、融合をつくる力となった。このような健全な行動によって、彼の憎しみの原因となっていた焦燥感が除かれたのである。憎しみをもっている人には、その原因となる相手を変える力をもつことはできない。

絶対愛は、人や国が新しいあり方をうけいれて、皮膚の色、階級、政党、国籍を越えて、自然にすべての人に愛をそそぐようになるために、一切を打ち込んで闘うことを意味する。そのような決意によってつくられた人は、かたよらず、普遍的であって

今日のように意見の相違、政治やイデオロギー的信条と伝統的な偏見のために分裂している世界に、もっとも必要な型の人間である。

変わることと、融合を通じて敵を破壊する代りに、信頼しあう友人にすることができる。

こういうふうに人の意志を効果的に扱うためには、自ら絶対の道徳標準を受け入れ、それに生きることである。

絶対の道徳標準にてらすとき、初めて意志は変わりうる。

四　力の源

人間の意志を根本的に変え、その状態を永続させるには、絶対の道徳標準を受け入れるばかりでなく、人間のもつ力以上のものが必要である。近代戦争がどんなに恐ろしくあろうとも、また飢餓や失業も、貧困の苦しみも、意志の根本に変化を与える力にはなっていない。独裁政治に伴う規律も、圧制も、意志を根本的に変えるには役立っていない。善意も、道徳的哲学も、説教も十分に効果をあげているとはいえない。人びとが盛んに自慢する教育方法も、知識の向上も、新しい型の人間を生み出してはいない。

しかし、利己心の奴隷となっているために、盲になっている人を自由にし、方向を

与えるように、人間の生きる動機を徹底的に変え、方向を与え得る力がある。

歴史をひもとけば、この力にふれたために、国のあり方に変化を与えた人がよく現われている。例えばモーゼ、釈迦、パウロ、モハメッド、アシジの聖者フランシス、ジャン・ダーク、リンカーン、ガンジーなどがそれである。他の人には与えられていない特殊の賜ものをこの人たちは持っていたのであろうか。普通の人間には理解できない悟りと力を与えられていたのであろうか。世界の五大陸におけるMRAの働きは、こういう人びとの効果的な生き方をすべての人の正常な生活となることができることを実証し、誰もが自分の国のあり方を変える力となり得ることを証明している。

どんなに自分の背が高くなることを望んでも、望むだけではどうにもならないように、考えるだけでは、自分の性格を変えることはできない。成長するためには、身体の外から食物をとることが必要である。人間の性質が変わるためにも、外から力を受けることが必要である。自分に正しい方向を与え、救ってくれる外の力を受け入れるときに、初めて人生の転換期がくるのである。

人間の改造は、自己の努力、すなわち自力のみによるものではない。静かに心を開

いて、生活の新しい方向をもとめるとき、それにともなう力も与えられるのである。これはごく簡単なことで、電気の理屈と同じで、なぜ明るい光を出すか、その理由が分らないからといって、スイッチを入れない人もなかろう。このように理解する度合が人によってちがうが、完全に分っている人は誰もいない。

部屋を明るくするために必要な動作は、スイッチを入れることである。人の性格を変えるために必要な動作は、静まって聴くことである。静まるとき、光と力が与えられる。

静まるときに、人ははじめて呼び覚まされた良心の声をきくことができるのである。四つの標準は、わたくしたちを正常な姿に立ちかえらせてくれる。というのは、それまでは逆立ちをしているので良心がさかさまになっている結果、人の失敗にはむやみに憤りを感じながら自分の失敗には驚くほど寛容なのである。さかさまの状態でいるから理想像を、あやまって自分だと思いこんでしまう。現実の自分を見るためには、絶対標準に照らして、静まることが必要である。

一たん良心の声をきけば、意志はいままでの誤まちを正すか、そのままにしておく

か、どちらかに決めなければならなくなる。ときには、金を返すことであろう。ある実業家の頭に、最初に閃いた考えは、「税金はどうだ」ということであった。彼は決心して政府に必要な金額を返した。あるいは自分の野心や嫉妬が原因で他人を非難したことを謝まることかも知れない。家族に対して全く正直になることかも知れない。われわれにできる範囲で、あやまちを正していけば、それまで自分をしばりつけていた利己心や自負心の力から自由になるのを経験するであろう。

毎日静まって、四つの標準に照らして、自分の考えを書きとめることが、一番よいことである。というのは償いをしなければならないことが浮かんだ場合、自負心は直ぐそれを忘れさせようとする。また、恐れというものは、それを償わないでもよいという理由を、直ぐにつくり上げるからである。簡単な考えでもはっきり書きつけてしまえば、自分の自負心と恐れに勝つための武器となる。そればかりでなく、経験によれば、最初に浮かぶ考えを書きつけてしまわないと、頭はすなおに次の考えに移りにくいものである。

このような静かな時間を毎日きめて持つと、今までより物ごとをはるかにはっきり

考えることができるようになる。利己心という目かくしをとってしまうと、他人や、日常の問題について今までにない自由な気持で考えることができる。そして友人なり、敵なり、国なりを変えるため、正しい計画を持つことができるようになる。

静かに聴く人には、良心の声が聞えるばかりでなく頭脳は全能力を発揮し、さらに、プラスアルファが与えられる。これによって、平凡な人が非凡なことをすることができるようになる。人に方向と力を与えるこのプラスが性格を変え、そして、人や国の行為の動機を洞察する力を与え、われわれの周囲にいる人びとの必要を理解し、さらにその必要にどう答えるかを示してくれるのである。このプラスは、人間の知恵にまさるものである。

古代の予言者や、その人たちが率いていた国は、それによって生活していた。それによって内外政策について、はっきりした方向が与えられていた。自由のために闘ったリンカーンも、これを経験している。「この力が天からくるものであることを疑う余地のないほど、私は神の導きを多く経験している。ある事がらについて、神が私にどうすべきかを知らせようとする場合、必ず何らかの方法で伝えてくれる」と彼はい

っている。このプラスは誰でも得られるものである。ある百姓はいった。「一体いつから神が人間に語るのをやめたのかと思っていた。ところがやめたのは神じゃなくて、人間の方が聴くことをやめたことがわかったよ」

あらゆる階級、民族、国々の何十万の人は、朝早く、一日の雑務の始まる前に、静かな時間をさいて、心に浮かぶ考えを正直に書きとめることを学んでいる。規律正しく考えを書きつけ、それを実行することによって、人びとの性格と、人間関係に徹底的な変化がおきている。これを通じ人間社会の広範囲にわたる変革がすでに展開し始めている。

心に浮かぶ考えが正しいかどうかを確かめるための検査は当然必要である。なぜならわれわれはしばしば利己的な欲望を偽装して動機が純粋であるかのようにみせかけるからである。今までに、自ら神に任命されたと信じこんで、自分の意志をおし通して何百万の人を破局にひきずりこんだ人たちによって、世界はしばしば痛い経験をさせられている。考えを検査する一つの方法は四つの標準に照らすことである。すなわち、この考えは絶対正直であろうか、絶対純潔であろうか、絶対無私だろうか、絶対

愛にかなっているだろうか。そこに少しでも疑う余地があれば待つべきである。汚れているかどうか、はっきりしないような白布は、汚れていると思ってよい。第二の検査は、同じ規律によって生活している人たちに、その考えを検討してもらうことである。窓が多いほど、部屋は明るくなる。どんな計画でも、このような人たちの意見を受け入れて、必要とあれば全部やめるか、一部を訂正する気持の余裕がないものは、むき出しの自我の現われであって、とうてい変わるとか、融合を生みだすものではない。

個人の問題でも、国家の問題でも、それを解決しうる正しい計画は、ときには一人の人に与えられることもあるが、完全な計画と解答は神への服従を誓いあった人びとに与えられるのである。神の導きは、われわれが互いに助けあうことが必要であるということを従来より一そう痛切に感じさせる。したがってこれは社会を融合に導く強力な力となる。

その結果は、まさしくルネッサンスを生むのである。家庭生活は革命化され、今までの単独行動とか、父、母、あるいは子の独裁のかわりに、家族全部が一つ心になっ

で得られる最上の考えと確信が与えられる。普通なら、怖れや、恥のために、かくされている事がらも、子は父に、父は子に正直に話しあうようになる。したがって、家庭の理解と融合が得られ、道義的勝利を当然のことと考える青年たちが増えてきている。そして家庭は愉快な精神的な交わりと力の中心になりつつある。

世界を再造することを優先的に考え出している経営者は、事業を行なう主な理由をここに見出している。社会正義と生活の安定を求める闘いの中で、労働者は、こうした経営者が味方であるということを知りはじめている。「誰が正しいか、ではなく、何が正しいか」の精神を産業界の基本方針とするために、労使双方が互いに必要であるということがわかってくる。世界中の数知れぬ多くの工場で、労使ともに、階級闘争で闘いとるものよりも、はるかに有効な、かつ革命的な結果が、こうした精神を通じて生みだされていることを経験している。この革命は、資本と労働を代表する人たちの心と、頭と、筋肉をすべて新しい世界の建設のために集中するものである。

「何が正しいか」の精神で政治を行なうとき、反対党に属する人たちとも融和する道を見出している。このような政治家は、特定の国家的見地から自由になっているか

ら、共通な問題を解決するため、他国の同じ気持の人びとと協力して闘っている。

マスコミも、最近大衆が問題のニュースばかりでなく、解答のニュースをよみたがっていることに気がつき出している。あらゆる民族、階級、国家に属する人びとは超越した権威ある神の導きを受け入れることによって、融和を見出している。その結果として、今日世界のいたるところの工場、農場、家庭、国会、学校、事務所にこうした人びとの細胞が世界網をつくっている。この細胞が、新しい社会の建設の中心となっている。

絶対の道徳標準と、神の導きを通して得られる、より高い慧知の力を身につけている人は誰でも、人びとや国々の意志を変える力になる。次にその方法を検討してみよう。

人間改造の過程は、五つの段階、すなわち実証、診断、解放、決意、使命に分けることができる。

五　人間の改造―実証

自分以外の人に、この改変（チェンジ）の経験を与えるためには、自分自身の生活のなかで新しい型の人格と、心を真に満足させるイデオロギーの二つを実証しなければならない。

ノルウェー国会議長であった故ハムブロー氏は、ブックマン博士の率いる一団の人びとをノルウェーに招待した際に、この新しい型の人格を次のように説明している。

「この一団の人びとは、われわれに欠けている生活の質を持っている。彼らは、自我を忘れることに成功し、他に奉仕し、他を助けることに熱心である。また普通われわれが、心の秘密の場所にしまいこんでいて、鍵を失っているため何か必要なことがあっても、探し出すこともできなくなっている事がらについて、ごく自然に話すことの

できる人たちだ。自分たちの間違いを快く認め、謝まることのできる人たち、他人に誤まちをした場合、公然と償いのできる人たちである。彼らは、自我とか利己心から解放され、それに縛られていず、互に新しい同志的結合で結ばれている。また怖れから完全に解放されているが、これはかくす何ものもないためである。その上、一番明らかなことは、彼らが幸福であることだが、それというのも、心を重くする秘密の重荷がないからだ」

ここに表現された新しい型の人間、そういう人は他人の必要を満たすことのできる人なのだがは、三つの特徴を持っている。

一、ありのままであること

人に改変(チェンジ)をもたらすという最も難しい仕事ができるためにはまず純粋でなければならない。ありのままでなければならない。多くの人が、いくら口で説いても、人を納得させることができないのは、いうことと生活とがくいちがっているからである。自分自身について真に正直で、自分の失敗や、誘惑を認める人は、決して、変に宗教く

さくなく、人を納得させる力をもっている。この人なら分ってくれると思うから、誰でもその人のところに行って自分のことを話すのである。

ブックマン博士は、この特質を次のように語っている。「この術こそ、誰でもが学びたいと思うもので、また是非とも学ばなければならないものである。われわれは、子供のためにも、これを学ばなければならない。子供たちが、何でも自分たちのことを親に話しにくるようでなければならない。そして親は、自分も子供と同じようであったことを自覚して、自分のことをありのままに話すようでなければならない。これが子供たちとピッタリする道だし、青年たちがわれわれの周りに集ってくるゆえんである。青年たちは、理解し、またありのままを話してくれる人のところに行き、決して善良ぶったり、賢明ぶる人のところには寄って来ないものである」

二、思いやりが深いこと

「一人びとりの人間はとても扱いにくいから、自分は一生を全人類のために捧げることにした」といった哲学者の気持はよく分る。よく個人的にはわがままで、けちで

ありながら、福祉事業には気まえよく金を出す人を見かけるが、こういうたぐいである。人間の性質を変えるには、その人に心をこめて接しなければならない。ということは、相手を喜ばせるためでなく、相手が自ら最上の人間にならずにいられなくなるように思いやることである。このようないたわりは決して愚痴をいったり、忍耐を失ったり、癇癪をおこしたり、また相手に要求することはしない。また、よいものは何でも人と分とうという気持を持つ正直な人を創り出す。常に相手の必要を自分のことの前に考える。また人の身分とか、財産よりも、その人の生き方の方が大切なことを知っている。そうした思いやりは細心で、すべての人を尊ぶ思いやりである。決して人にとり入ろうとはしないが、相手の人がどんな立場の人であっても、心から自然に打ちとける雰囲気を作るために努力することにはやぶさかでない。このような雰囲気をつくり出すためには、こまかい心づかいが必要である。例えば、部屋の飾りつけ、食事の準備、給仕の仕方、手紙の書き方にいたるまで、その人の趣味や興味をよく知るところまで気を配ることである。相手の靴に穴があいていたら、自分の足が冷たく感じるほど相手の必要に対する、敏感な思いやりである。

真の友情の秘訣はここにある。

三、話すよりも聴くこと

われわれの多くは、しゃべりすぎるため人を助けることができないのである。しゃべることよりわれわれの生き方の方が人を納得させるのだということを忘れてしまっている。人を変える秘訣は聴くことである。自分の心に平和を持たない人は、とかく口数が多い。他人のことよりも自分を中心に考えているときほど、会話の中心になろうとするものである。自分が中心人物になってその立場を維持しようとする一つの手段である。

自分が口数多く話をするときは、他人よりも自分のいうことの方が重要であるという誤まった考えがもとになっている。人の必要に答えるためには、こちらの話すことよりも、相手が話してくれることの方が、無限に大切である。噂話をすることは決して、人の本当の問題を解決する助けにはならない。というのは、誰だって、口の軽い人に自分の本当の悩みを打ちあけはしないであろうから。

ブックマン博士は、人々を訓練するにあたって次のようにいった。

「よくしゃべり過ぎる人がいるが、それでは、人の心をかちうることも、人を変えることもできない。何もいわないのが一番よい。全部分っていても、相手が話すまでは、一言もいわずにいるのがよい。それが秘訣だ。顔を真赤にしてＭＲＡを説明したり、大きな成果についてしゃべっても、何にもならない。成果は、そんなふうにして出来たものではない。そのことを、諸君にわかってもらいたい」

われわれはこの新しい型の人格のほかに、さらに心を真に満足させるイデオロギーを実証しなければならない。

一、普遍的でなければならないこと

一九〇九年にレーニンは「階級を越えたイデオロギーはない」といった。ＭＲＡはすでに、すべての階級、すべての民族、すべての国、そしてすべての男と女に適応するイデオロギーがあることを証明している。このイデオロギーは誰をもしめ出すことはしない。このイデオロギーの中心は、変わるということである。変わることで人び

とは互いの差異をのりこえ融和する力を得る。原子力時代の今日、本当に人を満足させるイデオロギーは世界を融和させるほど、革命的でなければならない。

インドのボンベイの日刊新聞バラット・ジョーチ紙は、一九五二年十一月十六日に次のように述べている。「資本主義は世界を融和させるには小さすぎる。共産主義にしても同様だ。MRAは、そのいずれにも反対するものではないが、そのいずれよりも偉大である。というのは、双方に欠けているもの、すなわち人間の性質を変えることのできる革命的な思想であるからだ」

二、完全でなければならないこと

人びとを変えると同時に、経済的、社会的、政治的な変革をもたらすものでなければならない。社会の一時的な変革だけでなく、恒久的な変革をなし得るものでなければならない。人間の心に住みついている憎しみ、怖れ、権勢欲、支配欲に答えることのできないイデオロギーは、平和と安定を創り出すには弱すぎる。世界的規模で、人間の性質を徹底的に、そして完全に処理しない限り、国々は、暴力と破壊という歴史

的道程をくり返すであろう。

三、全面的な献身を要求すべきてあること

われわれは世界を変えるための世界的勢力の一部として、後退することなく献身しなくてはならない。このような決心なくしては、人や国を善くしたり、幸福にしたりすることはできない。しかし、われわれが世界を変えるための世界的勢力の一部として、このような決心で、普遍的な、しかも完ぺきなイデオロギーに献身するとき、確信をもった資本家も、闘志をもったコミニストも、ともにかちうることができる。社会を建て直す効果的な道をまじめに求めている人は、誰でもこれに応えるであろう。世界の将来を決定するイデオロギーの対決は、終局のところ、現在ソ連および中共が持っている信念よりも勝れた信念を与えることが、果してできるか否かにかかっている。そのような信念があるとすれば、まず、われわれの産業生活、政治生活、国家生活、個人生活に実践して見せなければならない。それを抜きにして、単に、平和と安全を叫んでも何の役にも立たない。そのような計画は、みな小さすぎるし、間に合わ

ない。軍事的、経済的、政治的な挑戦には対処できても、イデオロギー的挑戦には、立ち向えないであろう。しかも、これが将来を決定するものなのである。これをなし得るものは、全面的な献身を要求するイデオロギーだけである。このようなイデオロギーはより偉大な革命を生むから、革命的な人びとの心をとらえるのである。

六　人間の改造——診断

医師は、病気の原因がわからなくても、症状がわかれば、それによって薬を与えてなおすこともできる。しかし道義上の病気の場合には、このことは当てはまらない。人間の意志を取扱っている場合、一般論をふりかざしてもだめである。それは二階の窓から目薬をさすような効果しかない。

病気が人体に症状となって現われるように、道義的敗北も人間の性格に現われる。両方とも徴候によって診断ができる。人を改造しようという場合、まずその人の道義的弱点は何であるか、またいかなるイデオロギー的信念を持っているかを知る必要がある。いかなる道義標準を受けいれるかによってその人のイデオロギーは決定する。

イデオロギーは道義標準を反映する。絶対の道義標準を受けいれない人は、その人がコミニストであろうが、資本家であろうが、世界に充満している利己主義と憎しみの一部にすぎない。それ故に、彼らは搾取にも、分裂にも解答を与え得ないのである。

反共主義が左翼の憎しみに解答を与えることができず、共産主義が右翼の利己主義に解答を与えることができないのは、このためである。絶対の道義標準をもとにした生活だけが、人間のなかにある物質主義をなおすことができる。したがって、社会に存在する搾取とか、分裂とかに終止符を打つことができるのである。絶対の標準によって生活しない人は、共産主義をどんなに攻撃しても、彼自身の道義的敗北は、彼が非難する物質主義そのものを助けていることになる。同じようにマルキストは、死を賭して資本主義と闘っているが、彼の心のなかにある憎しみは、仲間同士を融和しようとする努力すら麻痺させている。そして平和な正しい社会を建設しようとする彼自身の戦いをも妨害しているのである。したがってこのように相対的道義標準とイデオロギー的混乱は切っても切れぬ関係にある。

人間の道義的敗北やイデオロギー的混乱は三つの誘惑、すなわち、性欲、保身欲、

成功欲となって現われる。この三つの症状は、多かれ少なかれ誰にでも見られるが、その一つが他よりも強い場合がある。たとえば、資本家には保身欲の症状が顕著である。コミニストには、成功欲の症状が見える。それらを正しく診断することが根本的に大切である。外科医が正しく診断をして、病気の個所にメスを加えなかったら、恐らく手術は成功をしないであろう。

性欲の症状

人の行動とか、態度はその人を現わすものである。人を改造しようとする場合、まず症状を見分けることが必要である。

はずかしがり屋は、多くの場合、敗北のうちに生きている。彼らは一人でいることを好む。不自然な沈黙におちいる。何か心が自由でない印象を与える。体の動かしかたも、何となくぎこちなく、かたく、衝動的である。性格的にも本当のやさしさではない軟弱さがある。その軟弱さは、顔や性格に現われるが、それは善悪の確信のないところからきているものである。

男の人の服の着方、色の好み、靴のえらび方、頭髪のかり方、口のきき方、習癖、男、あるいは女との交際の仕方はみなその人の道徳的傾向を現わすもので、それによって異性を好む型であるか、同性愛型の人であるかが、分るものである。

スエードの靴をはいている男で同性愛でない人もたくさんいるが、ヨーロッパやアメリカでは同性愛的傾向の人の大多数が好んでスエードをはいている。また緑色を好んで身につける。ハンケチを必要以上に胸のポケットから出したり、使ったりする。頭髪も好んで長くのばし、香水を用い、わざとらしい口のきき方と気取った歩き方、女性的な振舞などもその現われである。こういう人はよく芸術的才能を持っている。露出症の傾向がある。普通サディズムは同性愛が原因であるから、この人たちは残酷で、執念深いことがある。機嫌屋でもある。

異性を好む多淫的な人は、普通、攻勢的であり、また短気で移り気の場合も少なくない。妻に忠実でない男はとかく口数が多く、うわべだけの陽気さを保とうとしている。性欲に敗北している人はよく信心深さを装っていることがある。お世辞たっぷりで真実味のない人間は、不純潔に負けている人である。

女の場合は、眼の使い方、化粧の仕方、着物などで診断できる。口紅とか、挑発的な服装は人の注意をひき、人に求められたい気持が強いことを現わしていて、どんな男にでも注意を払ってもらいたいといっているようなものだ。

性欲の強い人は、ほとんど例外なく煙草、酒、麻薬等に耽っている。また異性、あるいは同性に対する必要以上のなれなれしさなどにも、それが現われる。必要以上に手とか、腕、肩などをふれ合うものであるが、同性愛では、よく肘をつかむ。

社会に対しては、おおむね、なるがままに任せる態度をとっている者がある。自分の安楽は求めるが、人が何を必要としているかには一向関心を示さないのが普通である。重大な問題に対しても、軽々しく乱暴な態度をとる。こういう人たちは、自分が敗北しているから、政界や実業界に見られる不道徳との妥協は当り前のことだと思っている。

保身欲の症状

保身欲にかられている人は、怖れに捕えられている。現在より生活が不安定になり

はしないかという怖れに支配されている。怖れていると見られることは、自負心（プライド）が許さないから、自信あるごとく装って、けわしい眼つきをする。それは、鉄のような利己心となって現われる。それは怖れが生む、徹底した貪欲である。心のけわしい人は、怖れを持つ人である。

保身欲のもう一つの現われは、金銭が、家庭の問題、産業の問題、政治の問題等、すべての問題を解決すると信じていることである。「わしの病は金さえあればなおる」と冗談まじりにいう言葉は、多くの人の根本的人生観を現わしている。

保身欲にかられる人の弱点は、国家の場合でもそうであるが、金銭以外に、人に与える何ものをも持たないことである。このような人は衣食住が満たされ、教育と職が与えられさえすればマルキシズムに答えられるとまじめに信じている。したがって、世界一生活水準の高い国で、なぜ共産主義が盛んであるかが理解できないのである。人間には腹を満たす食物、手に与えられる職だけでなく、心をほんとうに満足させる信念が必要であるという事実が、怖れにかられている人には、まったくわからない。左翼の憎しみは右翼の冷酷さの産んだものであるということに気がつかない。彼自身

が追い求めている安定は、決して彼を満足させるものではないのに、何かの感ちがいで、他のすべての人もこの安定を必要としているものだと信じこんでいる。彼は、自分の子供にも、世界に向っても、これを金科玉条として伝えている。このような安定は、一種の偶像であって神ではないから本当に人の心を満たすことはできないのである。

保身欲で動かされている人は、周囲に自分の欲望と怖れとをうつしてしまう。他人の親切を、ときには無礼と感じられるほどの勢いで拒絶する。怖れに答を持っている人は、聰明で、親切であるばかりでなく、他の人の親切をすなおに受け入れる。人に与えることのほんとうの喜びを知っているから、決して他の人からその喜びを奪おうとしないのである。

保身欲にかられる人が、何かうまくいかないときは、必ず人を責めずにはいられないのも、怖れの現われである。自分がまちがったとか、自分の誤まちに全責任をとるとかということは不安でたまらない。とても他の人のまちがいの責任をとることなど思いもよらない。こういう人は何か仕事の計画をもっていないと不安定でしかたがな

いので、よかろうと、わるかろうと計画にしがみつき、一度たてた計画、とくに自分の計画を、頑固に固守しようとし、それが他の人の必要とか、感情とかを無視することになることなど一向かまわない。そして計画を変更する必要にせまられると、短気になり、その場の情勢には無関係に自分の要求を通そうとする。

成功欲の現われ方

成功欲にかられている人は、野心のとりこになっている。野心が彼をかりたてている。一時もじっとしていない。そして他人をもかりたてるのである。とても休んでなどいられないと思うから、よく疲労している。休息することは、時間の無駄だと思っている。活動していないことは重大な罪悪だと思っている。というのは、活動によってのみ、その目的を達成すると思っているからである。過労が興奮剤を要求する。こういう人は煙草を続けざまに吸い、酒をよく呑む。いつでも自分のしたことの手柄を認めてもらおうとしている。自分に与えられた地位と立場には、敏感であると同時に、羨むべき地位にいる人には取り入ろうとする。

自分を自慢しようとして、他の人を批判したり、けなしたりする。他人のよい業績とか、善い性質にはめくらで、したがって感謝の気持も少ない。自分が成功するためには、如何なるものにも邪魔されまいという決意は、鉄のような意志となって現われる。どうでも自分の我を通そうとする。また一人で働くことを好んで、他人と一緒には、働きにくく、他人のことについては、ほとんど無関心である。

その他にも成功欲にかられている人がいるが、それは、権力と支配を目的としているイデオロギーのためである。こういう人は断固たる決意をもち、無情で、一途で、何ものをも恐れない無法さを持っている。彼らの善悪の標準は、権力を獲得する闘いに有利か、不利かである。

現代人の道義的、イデオロギー的立場は、MRAに対する態度によって最もよく診断できる。利己的な標準は、絶対の道義標準によって明るみにだされる。イデオロギーを見わけ、理解するには、やはりイデオロギーが必要なのである。

MRAはすべての基になる真理であるから、論理的には、これに反駁することはできない。MRAは論争の余地のない道義的真理を基としていて、世界中のどこでも、

これを実践したところでは素晴らしい効果をあげている。

だから、MRAに対する反対には、特別な意義がある。道徳的に敗北している人は必ず反対する。例えば、不正直、不純潔、利己心によって社会的、経済的、政治的成功を得ようとする人がいる。ところが絶対標準はあらゆる不正直な利己的な行為をやめることを要求するので、この挑戦から逃げようとする人は自分を正当づけるためにMRAを非難する。これはまったく偽瞞である。

次には、道義標準を自ら生活し、他人をも導く立場にありながら、妥協しているために力を失っている人がいる。こういう人びとは、自分たちが相手の真の必要を満たし得ないのに、MRAの生活をしている人びとが成功しているのを見て、自負心(プライド)をきずつけられ、嫉妬を感じ、良心がとがめられる結果、攻撃してくる。この場合、必ず故意にMRAを曲解して攻撃する。MRAを理解できない人は例外なしに四つの道義標準のどこかに妥協がある。この人たちが、自分たちばかりでなく他人をも真理に対して盲目にしていることは悲劇である。こういう人は物質主義のイデオロギーに味方し、ときには、その間違った理屈までも借用することがある。

コミニストは、MRAが彼ら自身の世界制覇の計画を挫折するイデオロギーであることを認めている。一九五二年十一月二十一日、モスクワ・ラジオはソ連国内むけに、次のように放送している。「MRAは各大陸に橋頭堡をきずき、このイデオロギーを大衆に拡める能力のある人たちを養成し、今や全世界に展開するという決定的仕事にのり出している」

かつてナチスは、MRAが「妥協することなくナチズムに真向から反対するもの」で「ドイツ帝国内に新しい政治的、イデオロギー的状態をつくり出そうとしているもの」だといって攻撃した。左右の物質主義は、小児病的な、いささか笑止な非難をMRAに浴びせ、コミニストびいきであるとか、資本家の手先であるとかいっている。その実、絶対の道義標準と神の導きによって生活する人は、左右のいずれに反対するものでもなく、労使のいずれにも、米・ソのいずれにも反対するものでもなく、すべての場所の、すべての人が変わることを求めているのである。

人びとのMRAに対する態度によって、その人が何を必要としているかが最もよくわかる。しかし、自分自身に欠けているものを正直に知っている人は、それが分って

も、優越感を感じたり、自分だけが正しいという気持を起さない。あらゆる失敗をする可能性を自分が持っていることを知っているし、ことに過去において同じ失敗をしたか、あるいは将来同じ失敗をしかねない自分であることを知っているからである。だから人の弱点を知ってもいやな感じを持たず、むしろ、誰でも一皮むけば同じだという同情と理解を感じ、さらに自分自身の意志の奴隷になっている友人を解放したいと、心から願うであろう。

七　人間の改造——解放

第三の段階は解放である。それは人を自分自身の束縛から自由にすることである。このことは本質的に、人間が自分に対して徹底的に正直になり、今までに冒した間違いを正すときに起るのである——すなわち、正直と償いとである。まずあなたが相手を見るように彼自身、自分を明瞭にみなければならない。そして相手が彼自身のことをあなたに話し出せば、そのとき彼が解放される道が開かれるのである。「真実は汝を自由ならしめん」という言葉もある。

腫(は)れあがった敏感な自負心(プライド)は、その人が自分で恥と思っている点について沈黙を守らせようとする。それにメスを入れさせるには、彼が心の奥底で求めているものが必

ず満たされるという希望、解決があるという希望、長年月にわたる敗北すら勝利に転ずることができるという希望を与えることが大切である。そのためには、すでに変わった人の、家庭、職場、あるいは政治的生活に現われた革命的な事実を示すことがよい。こういった証拠を示すことが巧みであればあるほど、相手に与える希望と確信はより強いものになるのである。そのためには、診断の結果、その人のもっている問題がわかったら、それに当てはまる解答をもった人に紹介するがよい。同じような背景、責任、問題をもった人が変わった卒直な話の方が、何時間も理論的に説明するよりずっと効果がある。

正しい時機に、あなた自身の生活の中で、その人の敗北に似た経験を正直に話すがよい。こういうふうに自分の生活のすべてを友のために捧げることは、彼の心の扉をひらく鍵となる。それによって彼は、このような問題になやむのは自分一人でないこと、また珍らしくもないこと、自分以外の人も同じような問題をもち、しかも解決をもっていることがわかるのである。

神のみが人間を改造することができるのであるから、人力ではいくら説得してみて

も、議論をしてみても役にはたたない。他人に対して自分が神となって、彼らが変わ(チェンジ)ることを強要したり、どうすべきであるかを命令することは、かえって反対の結果を生むであろう。あなたが下した診断をふりかざして人を攻めても、なんの役にも立つまい。彼が自ら正直になることを助けるどころか逆にますますむずかしくしてしまう。秘訣は、一歩ごとに導き(ガイダンス)を求めながら、それに従ってものをいい、行動することである。そのような場合、ときには相手が正直になることを促すような問いが与えられることもあろうし、ある場合には、彼自身の今までの生活のあり方が、いかに他人の害になっているかを話すのが正しいこともある。というのは、罪は人を盲目にするから、今言ったような手術が上手に手ぎわよくなされた場合、盲(めし)いた目をあけ、その人が自分の姿をありのままに見ることができるようになるのである。ガイダンスは、またその人がどういう人間になりうるかを示し、その人の真の使命を照らし出してくれる。

しかし、このままではまだ人格の中核、すなわち意志を捕えるにいたっていない。意志に革命をおこさせること、これが人生の闘いの中心であり、イデオロギー的闘い

の根本である。

人間の意志に変化をおこさせるには四つの段階がある。その第一は正直、純潔、無私、愛の絶対標準を人間の意志のあらゆる表現、特に性、保身、成功の三つの部門にあてはめてみることである。絶対の標準は、人間の利己的な動機をカモフラージュしようとするあらゆるものを、即座に、効果的に余すところなくはぎとってしまう。そして意志のありのままの姿を見せる。具体的に、これをするには、その人に対する神の計画を聴き求めるようにすすめるがよい。この場合、独りで聴こうとする人もあれば、友人と共に聴こうとする人もあろう。まず彼に絶対の標準を書かせて、このものさしで自分の生活を計り、頭に浮かぶすべての考えを書いてもらうがよい。初めてこれを行なうとき、おそらく自負心が邪魔をして、一つか二つの考えしか浮かばないであろう。しかし、また洪水のようにいろいろの考えが浮かびあがるかもしれない。この実験が成功するためにはただ一つの条件がある。それは絶対に正直であるということである。

第二の段階は、その人が自分自身について知り得たことを、誰か友人と話し合うこ

とである。本当に正直になると、自負心が砕かれ、自我の足かせがはずされるのを経験するであろう。正直になることを躊躇するのは、普通次のような理由からである。すなわち自負心、世間体、成功をさまたげはしないかという思惑、今後も今までと同じことを続けようという、ひそかな執着などである。しかし過去、現在、未来、そのいずれにもかくしごとがあってはならない。すべての持ち札は机の上にさらけ出されなければならない。

第三の段階は、再び紙とペンを手にして、彼自身の不正直、不純潔、利己心、嫌悪などが特定の人をどのように傷つけているかを考え、書きつけることである。そうすれば、彼が誰にあやまり、償いをしなければならないかがわかる。

自分自身に徹底的に正直になった人間は、許されたいという気持を強く感じるであろう。事実、許されることが必要である。後悔の気持が純粋ならば、必ず彼は自分の自我のために苦しんだ人の許しを求めるであろう。直接にその人に許しを求めることが必要で、単に神の許しを求めるだけでは意味がない。一方、許しを求められた人も「われらがおかす罪をわれらが許す如く、われらの罪をも許したまえ」という真理に

生きなければならない。

あらゆる人との関係にもガイダンスを求めることが必要である。四つの絶対標準にあてはまらないものは、すべて正さなければならない。自分の方は一分しか悪くなく、相手は九分も悪いのだと思っているような場合にも、相手を指さずに、自分の分に対して償いをするように助ける必要がある。償いは無条件でされねばならない。

ガイダンスは常にその人にでき得る償いしか要求しない。たとえば、非常にかんしゃくもちの人に対しては、「かんしゃくを起すな」ということよりも、むしろ不純潔な、あるいは不正直な間柄を正しくせよと示すであろう。それを実行したときに、かんしゃくはすでに問題でなくなる。自分にできることを正せば、他は神の力によって行なわれるということは、すでに実証されているところである。

償いをするとき、多くの場合、相手に罪を自覚させ、変化をもたらすことがある。これがわれわれの持つ最上の武器である。一人の人の、あるいは一つの国のよいことも、悪いことも、このように用いれば、相手を変える力となる。人間の経験全部がこのために動員される。まず自分からこのように変わり始める人は、いち早く自分の属

している階級、民族、または国が必ずしも正しくはなかったことに気がつく。卒直な謝罪、新しい態度、そして間違いを正そうという決意は、他の民族、他の階級、そして他の国々の偏見と恨みとをなくさせるのである。このようにして、一人の人の変革はイデオロギー的に役に立ち、分裂した世界に融合をもたらすことができるのである。

第四の段階は、彼自身の意志よりも高い意志を、彼の生活の中心力として、彼が受けいれることである。これが問題の神髄である。そこまでいかないと、一時的に全力をあげて行動を起すことはあっても、ながつづきさせることは不可能である。そのようなやり方は効果もなく、役にも立たないので、多くの者は、とうの昔に努力をやめてしまっている。そして自分は決して変わることができないと冷笑的になり、その結果、他人に対してもこの希望を失ってしまう。というのも、意志というものはちょうど鋼鉄のバネのようなもので、ある期間曲げておくことはできても、元の力がなくなったわけではないから、とてもできない相談だとその努力をやめた瞬間に、制禦できないほどの強さをもって元にはねかえってしまうのである。意志は必ず存在する。た

だ問題は、自分の意志か、あるいはそれより以上の意志か、そのどちらかを選ばなければならないことである。

自我をすてることは、いのちを捨てるようなものである。それは自我を抹殺することである。ある偉大な革命家が自分の体験を表現して、「私は日々死ぬ」といっている。このことは、「十字架を背負う」とも表現されている。これは自我を捨て、より高い意志によって生活するという根本的な決心と、その決意を日々新たにすることを意味するのである。

意志は「自我の本性」の現われである。それは英語の大文字のI(アイ)であって(つまり私、自分)、より高い意志が支配することは、この大文字のI(アイ)が消されることである。すなわち「十字」である。これはキリスト教徒にのみ通用する教義ではない。この経験は、毎日あらゆる場所の、あらゆる人に必要なものである。私の意志が神の意志にぶつかり、私が神の意志を選ぶときに、意志は十字架につけられ、より高い意志の支配がはじまる。この経験は人間性の改変(ヘンカン)には絶対に必要なものである。これが根本的な病源に対する根本的な解答である。これが、人びとや国々を永続的に変わらせ

る唯一の力である。

ガンジー翁はこの心理を理解していた。彼の好んだ詩に次のようなのがある。

栄光の給いし
奇しき十字架みあげれば
富も栄誉もすべて捧げ
傲りの心をさげすまん

八　人間の改造——決意

ここまでは、正直と償いとの実験が行なわれてきた。次には決意がなされなければならない。

その決意とは、今日以後、人と国の最も必要としているものに答えるために生涯をまったくささげるということである。これは結婚する場合や小切手に署名する場合と同じようにはっきりとした契約である。

この契約は三条からなっている。

一、毎日を絶対の道義標準によって生きること。これは毎朝、時間を（たいていは一時間）規律的にもち、導き（ガイダンス）を聴き、頭に浮かんだ考えを書きしるすときに現実とな

る。それから日々、自分の考え、言葉、行為でまちがったところを卒直に認め、償うことである。

二、あらゆる人間関係、所有物、計画を人間以上の意志の支配下におくこと。これは家庭、仕事、金、時間、精力等について自分の最後の決定権を放棄することである。具体的にいえば、一切の事実を革命の同志に話して彼らの導きを求め、それを尊重することである。

三、世界の革命のための勢力の一部として後退することなく献身すること。これは世界を改造する闘いに全生涯を投げこむことである。これ以下の献身は変わるという的から外れている。一方全面的にこの献身をすれば、そのまま革命の中心に立つことになり、そのとき心のなかでも、国と世界に対する責任を全面的にとるようになる。分裂的な物質的イデオロギーに代って世界を改造しうるものは唯一つ、それは世界的規模で融合した多くの人々が一つの勢力となって普遍的な思想のもとに献身することである。

この献身をMRAという。これは真の民主主義のイデオロギーである。組織ではな

く、有機体である。入会することもできなければ、脱会することもできない。それは生活のあり方そのものである。人間の真の必要に答える力は、いかなる組織よりもはるかに強い団結力と効果をもって人を融合する。その力が、歴史始まって以来最も大きな仕事のために、人びとを引きつけている。現代の世界で融合を生みだしているのは、この有機体である。

このような決意だけで訓練された革命家ができるわけではないが、これは第一条件である。この決意によって新しい支配権下に自らをおくことになり、一つの偉大な目的のためにすべてのものが従属されることになる。そして新しい友情と同志的な結合を知るようになり、世界家族の一員になるのである。

九　人間の改造——使命

前章のような決意によって、人は真の使命に向って一歩を踏み出す。この使命を全うするためには、人びとの最も深い必要に答える生活の質をもち、その方法を学ばなければならない。それは、人を納得させることができるように四つの標準を生活し、それによって自分の改変（チェンジ）の体験が他の人に役立つように生きることである。日常、この標準によって生活していないために、個人ばかりでなく、国までも方向を失っている。妥協は人をめくらにし、つんぼにし、束縛し、無力にし、分裂をもたらし、加速度的に拡がっていき、個人および国の運命に致命的な影響を与える。

絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛の四つの標準の針路からなぜ外れるかは、

誰でも承知している。それは誘惑の力である。ある人は「どうもわたしは、違法なものとか、不道徳なものとか、欲望をそそるものが好きで困る」となげいたが、誘惑に対するただ一つの賢明な対策は、それに逆に乗じることである。誘惑について沈黙を守ることは、不道徳と妥協する道であり、これに反して正直になることは必ず勝利と力を得る道である。

誘惑は、まだ現像していない写真の原板のように、明るみには耐えられない性質のものである。誘惑を明るみに引き出せば、誘惑にかられている人を直ちにその束縛力から解放することになる。「真実は汝を自由ならしめん」という言葉は、日常の体験となるべきである。鳥が頭上を飛び廻るのを防ぐことはできないが、さりとて髪のなかに巣を作らせる必要はないわけだ。

こうして解決された誘惑は、用いることができる。注意深ければ、その日のうちに家庭や職場でその誘惑について正直になることによって、新しい生命を人に与えることもできよう。相手の心を開く鍵となって、彼の必要に答えることもできよう。

自分の誘惑はどういうものであるかを、そのまま見きわめることが必要である。わ

れわれはよくみにくいものを快い名称で呼んで、手術すべき個所に、それをやわらげる軟膏をぬるだけで済ませようとする。「浮気」と名づけるものは、実際は「肉欲」である。「批判」と名づけるものはたいてい「ねたみ」か「独善」である。仲間外れになったような気持や、認めて貰えないような心持ちは、傷つけられた自負心（プライド）と、挫折した野心の混合したものである。優越感や劣等感は自己中心から生まれる。不当に取扱われたと思う気持は「怨恨」である。こうして動機と気持について正直になれば勝利は必ず得られる。

誘惑のあったときに、「つまらないことだ」とか、「まず誘惑に勝ってから口にしろ」とか、「うっかり正直になったら自分の本性が誤解される」とかいった自負心（プライド）がわれわれに黙っていろと忠告する。こういうことは希望的観測のもうける巧みな落し穴である。それは、われわれを見当外れの闘いにおびきだし、不必要であるばかりか、われわれを無能にする内面の闘いにかりたてる。われわれは自分の仕事とか、計画、着想に時間と精力を使うが、自分の周囲の人びとが必要としている不純潔、自己中心、不正直に対する答えを与えずにいる。

常に人に得心を与えるような生活を続けることも、われわれが正しく闘っていれば簡単である。それは早く、的確に、正直になる闘いである。それをしたとき自由と勝利と力は、夜につづいて朝がくるのと同じように確実に与えられるのである。

この生活を生きる力は同志的結合から生まれてくる。それは、永久に自分の意志でなく、神の意志に生きることを決意した人びとに与えられる友情である。この心のつながりが人びとを日々新しくし、心の支えを与える。この体験は次の数行に表わされている。その中の一行に「私の心が内も外も清め続けられるように」(Make and keep me pure within) というのがある。それは「英文のなかで一番偉大な一行である」とブックマン博士はいっている。

豊かな恵みが神の中にある
それは私の罪を蔽ってなお余りがある
癒しの力があふれ、流れるように
そして私の心が内も外も清めつづけられるように

神は命の泉である
その力が限りなく与えられるように
そして私の心の中にあふれ、流れ
永遠の仕事に向わせてくれるように

使命を全うするためにさらにもう一つ必要な条件は、この新しい思想と生活を国々に伝えるために他の同じ革命家たちと一緒に働くことである。人の使命は常にその人の仕事より偉大でなければならない。人によっては新しい活動をするには、あまりに忙しく、時間の余裕がないと感じるであろう。しかし、MRAは、もう一つ別の活動といったものではない。それは生活のあり方である。しなければならないことをする方法である。それは生活のなかで優先すべきものをはっきりさせ、たとえ達成しても問題を解決しない幾多の活動から解放させるものである。物質主義的な勢力が進展するのは、その思想の力によるのではなく、他に人を心服させるほどの世界的な思想が生活に実践されていないからである。悪への熱情的追求は善への熱情的追求によって

のみ答えられる。世界を支配しようとする仮借ない人たちの計画に答える唯一の力は、改変（チェンジ）と融合のイデオロギーを社会と国々にもたらす決心をしている人たちだけがもっている。

さいは投げられた。国々は、組織された物質主義か、MRAかを選ばなければならない。その選択はわれわれの手の中にある。われわれの決意が将来を左右するのである。

十　なぜ問題が起るか

コミニストは、現代の世界では非常な利点をもっている。それは究極の目的がはっきり教えられ、どういう社会を作ろうとしているかをよく知っているからである。

共産主義に反対している者は、多くの場合、こういう利点をもっていない。こういう人たちは何億人もいて、多くはいわゆる「善良」な人間であるが、あまりにも自分たちの「善良さ」に陶酔しているために、ほとんど効果をあげることができない。

世界を説明しようとする人間の情熱が理性の時代を作り、また世界を支配しようとする人間の情熱が意志の時代を作ったとすれば、世界を変えようとする人間の情熱は新しいルネッサンスの時代を作ることができるはずである。ここに人類発展の次の歴

史的段階が見出される。

しかし、人間の意志を変革する秘訣を何百万の人びとが学ばない限り、コミニストの計画は必ず功を奏して、善意の人びとの努力は無力のままに終ることになるであろう。

なぜかといえば、コミニストは情熱と団結をもって世界的に行動している。ところが非共産世界は情熱にも団結にも欠け、右往左往しているだけである。共産主義に反対すると同時に、おたがい同士反目し合っているのである。抗議はするが、しかし自分たちはそっとしておいてくれ、といっている。

共産主義に反対する人びとの致命的な弱点は、自分たちが個人として、また階級や国家として、いったい何によって導かれているかを正直に認識しようとしないことである。また、一方では熱狂的な唯物思想が全世界を支配しようと総力を結集している時代に、世界のルネッサンスより小さい目標に左右されていることの間違いを認めていない。しかもこのような人生の目標の小ささを正当化しようとするから、すべてのものの評価を間違ってしまうことを認識しない。

どんな人でも、民族でも、国でも、「何が欲しいか」によって支配されるか、「何

が正しいか」によって動かされるかどちらかしかない。そしてどんな人でもこの二つの考え方のちがいを感じる心の琴線はあるものである。

しかし、人間の頭は何世紀にわたってこの良心の中核を黙殺しようとして、いろいろ理屈をでっち上げ、「何が欲しいか」がいかにも「何が正しいか」と同じであるかのようにいいくるめようと努めてきた。いかにしてこのように頭が心を凌駕してきたかは、二十世紀の社会状態を見れば明らかである。

誰でも何らかの怖れによって導かれている。他人がどう思うかという怖れ、失敗しないかという怖れ、笑われはしまいかという怖れ、暴露される怖れ、くびになるという怖れ、選挙に落ちるという怖れ、顔が立たないという怖れなどである。自分が持っているものを失う怖れ、欲しいものが手に入らない怖れは、今日の階級闘争と国際紛争の主な原因になっている。

そして、人間は自分の思う通りにやろうとする意欲があまりにも強いために、怖れは嘘つきだということを分ろうとも信じようともしない。

金銭もまた、人間社会の大きな指針である。金銭そのものにはほとんど価値はな

い。ドル札を食べるわけにはいかないし、ポンドの札びらで家を建てるわけにもいかない。

しかしわれわれの金銭に対する態度は、われわれが何に動かされているかを示す場合が多い。最も活動的な人間や国家のなかには、金さえあれば「欲しいもの」がよけいに手に入るだろうと思い、富をふやすために全力をあげているものがある。

また、大きな産業のなかでは、同僚や株主の富をふやすのが唯一の目的とされて、世界の一番優秀な才能がこれに向けられている。一方、組織された労働界では、賃金を繰返し繰返し増額させるために長年にわたって闘争する人たちがいる。こうして労使がともに貪欲によってはげしい闘争に導かれて行く間に真の富は破壊され、そのすきに強制と独裁によって永久にこのような闘いを沈黙させるイデオロギーがはいってくる機会となっていることを忘れている。

しかし、人間の心は普通、不正や悪に導かれることを好まない。だから、正しくないものが何百万の人びとを導くことを正当化するために、いろいろの名称やスローガンや理論が発明されるのである。

たとえば、男は個人的に成功すること、すなわち名を挙げたり、家族のために金を儲けることが義務であるかのような教育を受ける。実際にはこれは利己的な目標であって、自分や自分の階級、国のためにだけつくそうとする野心は、世界を破壊する一番の原因になっているという事実は、学校や大学では指摘されない。かといって、これ以外の人生目標が示されているわけでもない。そこで、他の目標がないため、今日何百万の学生が共産主義に走っていくのである。

「啓発された利己主義」という言葉は、利己心を私生活の美徳であるかのように見せかける用語として役立っている。

これと同じように、いわゆる「戦闘的」労働組合幹部とは、労働者のために仕事の量を減らして賃金を殖やすことに成功する者だとされている。

また、いわゆる「腕きき」の実業家とは、製品の値打ちをできるだけおとして、国民に高い値段で売りつけることに成功する者だとされている。

さらに「愛国者」という名前もおうおうにして、自分の国を破壊する手助けになるような主義を唱える人の名称となっている。すなわち「善悪はともかくとして、自分

の国が第一だ」ということは、国家生活の間違いを守るために生命までささげる人びとのスローガンになる場合がある。

このように、誤まった価値判断が人びとの心をとらえているために、こうした間違いを正しくしようとする人びとの努力は、かえって「愛国心」の名によって、罵倒されたり、あらゆる攻撃を受けることがある。

間違った価値判断のために、「何が欲しいか」とか「間違ったもの」とかに導かれている人びとが平然として生活し、国家の重要な責任を負う地位にまで登ることを許しているのである。たとえば、五十年前、西洋諸国の一部では離婚、不品行、また不正直などは、社会的にみとめられたり、成功したりすることのさまたげとなった。今日では、責任の地位にある者で道徳的にルーズな人は国を弱くする者だなどといったら、直ちにファッショだとか、私生活の権利に干渉する者だとか攻撃される。

間違ったことに妥協することが「リベラル」であるとして、近代人のたしなみであるかのように考えられている。

イデオロギーの時代には一人びとりの生活が国の生活に影響する事実、また如何な

る場合でも、道徳的にルーズな人はその国にとって第五列の役目をしている事実は、認識されていないか、または無視されているのである。

わずか五、六十年間にかくも正反対になった一つの原因は、道徳的にふしだらな人たちが世界中に共通の利害関係で固く結びあっているからである。

即ち、世界中の新聞、ラジオ、出版界には、道徳的な弱さを共通のつながりとしている人たちがいる。長年、彼らは、自分たちの生活に挑戦するような道義標準を生活している人びとを中傷し、逆に自分たちの仕事のやり方に意識的にしろ、無意識的にしろ同調する者に賛辞を送ってきた。それによって彼らは世界的な規模でルネッサンスを起し得るような如何なる道義的なイデオロギーをも無視するか破壊しようとすることを共通の目的として互いに連絡しながら働いてきた。

彼らの世界的な規模の目標は「だらく」であり、これに「進歩」というレッテルをはっている。「私生活は干渉すべきものでない」といって、「自分のあり方が国のあり方、国のあり方が世界のあり方である」という歴史の真実と経験を否定しようとしている。

MRAは人間の意志の方向を変える秘訣と、唯物的革命の横行する現代に対応できる唯一の答えをもって全世界にルネッサンスをもたらすことのできる情熱的な世界勢力を作りだしている。

ウィリアム・ペンは「人は神に導かれることを選ばなければならない。さもなくば独裁者の支配に屈することになる」といったが、これは現代の世界が直面している岐路を表わした言葉である。

十一　一人から百万人へ

MRAの人びとは、現代の世界に二つの利点を持っている。その一つは自分が何に向って進んでいるか、またどんな形の社会を建設しようとしているかを正確に知っていることである。もう一つはその知識が理論によるものでなく、実際の経験によるものであるということである。

フランク・ブックマンの生涯をつらぬいている偉大な教訓は、若いころある工業都市の労働者街で、貧しい不遇な子供たちの世話をしていたときから始まったものである。ある時その仕事の資金が不足した。そこの六人の理事は子供たちの食糧を切りつめて節約することを決議した。少年たちは腹をすかせ、ブックマンは憤慨した。

彼の計画も理想も、この六人の理事の利己心によってめちゃくちゃにされたと感じて、彼は辞表を出した。憤懣がおさまらぬままに彼は健康を害した。専門医に相談すると、毎朝、温浴と冷浴を交互に行なうようにすすめられたが、数ヵ月これを励行しても一向に気分は晴れなかった。

彼の心は恨みに燃え、それが正しいとさえ信じていた。そして、多くの革命家は、そこで他の階級、他の民族を憎悪し、それを打倒することによってのみ、正義をこの世に生み出すことができる、と結論するようになってしまうのであるが、彼もまたその道を歩んだのである。

ところがある日、ブックマンは彼のもっている憎しみの感情も、六人の理事の行為と同様、この世界の病気の一部であることに気がついた。

「もしあの人たちが間違っているというなら、わたしはその七番目に間違っていた人間である」と彼はたびたび述懐した。そして世界を変えたいと望みながら、一方で自分自身を変えることを望まない人間ほど反動的で無能な者はないということに気づいたのである。ブックマンはその六人に詫び状を書いた。「親愛なる友よ、わたくし

はあなたに対して悪意を持ちつづけてきました、申し訳ないと思います。許してください」と。

ちょうどその日の午後、ブックマンとある湖のほとりを散歩した友人は、彼が変わったことに気がついた。ブックマンは自由な人間になっていたのである。一体何が起ったのかを聞き、ついにその友人もその場で変わる決心をした。（注「フランク・ブックマンの秘訣」二十二頁～二十七頁参照）

フランク・ブックマンが、第一次世界大戦後の軍縮会議にでていたとき、イギリスの一将軍が人の顔のかいてある漫画の絵はがきを送ってよこした。絵の下に「神は人間に二つの耳と一つの口を与えたのに、なぜ人間は話すことの二倍、聞かないのであろうか」と書いてあった。ブックマン博士は、狂気の支配する現代の世界で正気といえる人間は、神に導かれている者だけだと確信していた。すなわち、神の心から人間の心に常に、適切で正確な、しかも具体的な考え方が与えられるということ、そして個人も国家も神に導かれることが、正常なあり方であると確信していた。

四十年前のある夜、汽車旅行をしていたブックマン博士は一晩中たえまない車の音

に耳を傾けていた。その音にあわせて心の中に一つの声がはっきりと聞えていた。「辞職、辞職、辞職」

それは大学での安定した職をやめ、生涯を世界再造のために捧げることを意味した。

彼は決意して辞職した。それ以来、生涯を通じて一銭の給与も受けたことがなかった。このことはMRAのために働くすべての者にとっても同様である。すなわち、世俗的なすべての安定を断ちきって、「神の導くところには、神は必ず必要なものを与える」という確信のもとに生きているのである。

一九三八年、MRAは世界的段階に入った。ブックマン博士はドイツの「黒い森」を散歩していた。突然、彼は次の歴史的構想を得た。「道義的、精神的再武装、世界史における次の段階は国々が道義的に再武装することであろう」その後の発展は、この考えが輝かしい勝利を得ていることを物語っている。

第二次大戦以来、スイスのコーやその他のところで開かれたMRA世界大会に、百十八ヵ国から十五万以上の人びとが出席している。

フランク・ブックマン自身は、MRAをこういっている——

「MRAは偏見から解放された生活、すなわち党派、人種、階級、宗派、見解、または個人的な利益を越えて誰でもが直ちに建設的な行動にはいれる公分母である」

「これは神の所有物で誰もが欲している新しい考え方、新しい指導精神である。これは個人としても、また国家としても神の支配の下にあることを意味する。これは神の導きがもたらすところの知識であり、正確な情報でもある。またこれは狂気の世界を正気に戻す神からの贈りものでもある」

「MRAは正直、純潔、無私、愛を個人的にも、国家的にも、絶対的のものにすることを意味する。MRAは人を変える力である。——敵をも味方をも——また他の人をも他の国をも変える力である」

「MRAは誰にとっても善いものだが、自分自身には必要欠くべからざるものなのである。他の国にも役立つであろうが、一番役立つのは自分の国、そして自分自身にとってである。利己心や分裂を産むせまい考え方から人や国を守ってくれる」

「MRAの目的は二つある。第一は神を国家生活の主導力として復元すること。第

二は真に健全な国民生活をうちたてることである」

「MRAは世界中のすべての人の心と家庭に入りこまなくてはならない」

「MRAは人と国を再造するのに寸時を争う。それは普通の人が世界の再造という偉大な仕事につくす機会なのである」

世界のイデオロギーの闘争についてフランク・ブックマンはいう。

「イデオロギーの闘いこそ、新・旧約聖書を築きあげた花崗石であった。ところが今日、多くの人は花崗石の代りに角砂糖を使っている。だから物質主義を癒すことができないのである」

「MRAは初めから根本の問題に触れていく。それは罪を認識することである」

フランク・ブックマンは、つねに罪を除くために四つの段階がある、といっている。第一に罪を憎み、第二に罪を捨てること、第三には罪について正直になり、最後に罪を正すことによってこれを償うことである。「あなたは『罪ということが口にされるのはいやだ』というかも知れない。気の毒であるが、それは口にされるべきである。ただ、それがわかる程度に口にして、すぐ次の段階に進むべきである。そして直

ちに反応して、チェンジする鋭敏さをもっていなければならない。それがまた一つ、奇蹟を生むのである。チェンジは今日起るべきである。昔、われわれの祖父や祖母が罪について素朴な説教をきくのを好んで、毎週水曜日の夜、教会に行ったものである。そのための時間があれば結構だし、ないというならば作る必要があるかも知れない。罪を取りあげるには最小限であってはならない。最大限に強調さるべきである。しかし償いを早くしなければならない。変わり、融合し、闘うこと、これが自然の順序である」

「昔からある基本的な真理をここに見出すであろう。ただそれが力強い、感動的な強さをもって迫ってくるのだ。MRAは、人と国との利己心と便宜主義が、あたりまえのものだとされている今日、絶対道義標準をとり戻すものである」

「四つの絶対、――正直、純潔、無私、愛をとってみよう。この四つは、たいした価値のないもののように思う人もいるかもしれないが、しかし国民に心の正しい武装を与えるには、これらの簡単な基本的な標準を与えなければならない」

「まず、正直をとってみよう。国のなかはどうか。例えば事業契約のような場合、

不正直な者がいないだろうか。汚職や闇取引は、常に大ぜいの人の時間や精力や、また何百万ドルもの金をも浪費する。昔は不正直をほめる人は一人もいなかった。しかし今日では、不正直で成功している者が称賛されている」

「次に純潔をとってみよう。こんなことは個人的な事柄だという人もいるだろうが、国は一体どうなっているだろう。工場などでは不純潔がごく普通なことになっていて、労働者が組織して行動しているとまでいわれている。特に破壊的分子は、それを武器として使っている。彼らは人間の道徳がみだれるとき、考え方も混乱することを知っている。人びとは『困ったことだ』とつぶやきながら毎日曜日には教会に行き続ける。が、何も起こらない。国を浄化する偉大な力を生み出そうとする人が、あまりにも少なすぎる。誰も国の状態をなおそうと努めなくなったら、一体どうなるだろう。家庭の破綻、落ちつきのない子供、文化の衰微、そして破壊的な革命の温床ができ上る」

「無私と愛にいたっては、もはや無私を装おうともしないし、また、人を愛しようなどとも考えない」

「人びとは、四つの標準などは、前時代の遺物として片づけてしまっている。だから自然、これが国の問題と密接な関係があるものなどとは考えもしない。それ故に今日、世界がこんな状態になっているのである。しかし、この四絶対に生き、そのために立ち上ろうとする人たちができれば、何ものにも負けない、強い建設的な勢力を社会にもたらすことになるのである」

「そうしたときに、ほとんど忘れられていた原動力、聖霊を経験する。そして、それが神からのはっきりした直接の呼びかけとして、正確に何をなすべきかを知らせてくれる」

「われわれは、まだわれわれの必要としている精神革命を、経験し始めてはいない。革命が必要だ。そして、明晰な神の光の下に立つとき、この輝かしいルネッサンスを経験するであろう」

「このことを現実として知ることも大切だが、さらにこれを国家的基盤で実行することが必要である」

「諸君の弱点はあまりにも理想主義的であるため、その希望が家庭の中ですら実現

できないことである」

「われわれ一人一人が神がもっている最高計画を見つけ出さなければいけない。われわれの弱点は、われわれ自身が責任をもって考えなければならないことを、すべて政治家にまかせ切って、しかも、これを民主主義と呼んでいることである」

「国が崩壊するまえに、国民の考えが崩壊してしまっている」

「右翼であるべきか、左翼であるべきかを考えて人びとは混乱する。が、われわれに必要なことは、神の聖霊によって導かれることである。それこそ、われわれが学ぶべき力である。そのときはじめて、混乱を終結させる鮮明な光を与えられる。聖霊は、われわれに如何に考え、また如何に生きるべきかを教え、われわれが具体的に国に尽すべき基盤を与えてくれる」

「われわれ一人一人が道徳の雰囲気をつくることに努力しなかったら、一体、われわれの民主主義はどうなってしまうだろう。多くの人びとは自分の問題に忙殺されていて、国のことを考えるのを忘れてしまっている。わたくしたちの使命は神の導きに従うことである」

十二　奇蹟をつくる

これは、フランク・ブックマン博士が、一九四八年、カリフォルニア・リバーサイドで開かれたMRAの世界大会で、人間の改造について彼の最初の経験を話したものである。この経験はブックマン博士の生涯の第二の転機となったもので、これを通して人間の改造について多くを学んだのである。

これから、わたしはみなさんに四十年前の経験をお話したいと思う。当時の民主党全国委員会の議長が、わたしにペンシルバニア州立大学に行って、大学当局と学生との対立を、何とか解決してくれないかというのである。彼はその大学の理事の一人であって、この問題でなやんでいた。また確かになやむべき理由もあった。学生のストライキが始まっていたのである。空気は険悪だった。彼は、わたしがこの問題を解決することができるだろうと思ったのだが、わたしにはそのあてが全然なかった。これは自分のでる幕ではないと卒直に話したのだが、彼はなかなかあきらめず、わたしを

追いまわしたので、とうとう行くことに同意した。

わたしがそこへ着いた晩には、禁酒法施行中にもかかわらず、校内では十九の酒盛りが開かれていた。軍艦を浮かべるほどお酒がたくさんあったと人々はいっていた。

今日では、学生のストライキは珍らしくない。わたしがペルーのリマへ行ったときも、イギリス公使が最初に、わたしにいったことは、「学生がストライキをやっていますよ」ということであった。サンチアゴでも、カイロでも学生ストライキがあった。今ではどこへ行っても見受けられるが、四十年前にはめったにないことだった。そのため、この大学はフット・ボールの試合に負けてばかりいた。また優の成績をとる者もいなかった。大学全体が、何か重苦しい空気につつまれ、敗北感があふれていた。これは近代教育の副産物であって、アメリカの大きな問題の一つとなりつつあった。

この大学には学生生活全体の鍵ともなるべき男が三人いた。その一人は、ビル・ピックルという男である。MRAが、どのようにして、ごく普通の人に入っていくかと

いうことをこれから話してみよう。ピックルは、その大学生活のなかで、一つの重要な要素であった。彼はある陸軍大佐の庶子で、妻と十二人の子供があって、みんなが彼らのことをピックルス（つけもの）と呼んでいた。昼は田舎医者の馬丁をして、夜は学生たちに酒の密売をしていた。わたしは、夜遅く彼が人目を忍んで、曲りくねった階段をそっと登って、学生たちの部屋へ行くのをよく見かけたものだ。在校生だけでなく、最近の、またずっと前の卒業生も、みんなが彼の世話になっていた。フット・ボールの試合や大学祭のときなど、ビルはとくに忙がしかった。州の法律が酒場をゆるさなかったので、彼は、密売の酒を一手にひき受けて売っていた。

ビルは、わたしが行くことをいち早く知って「あいつがきたら、ナイフで刺してやる」といきまいていた。彼は強くガッシリしていて、海象（せいうち）のような口ひげを生やし、まるで怒号する海賊といった風体であった。しかし同時に、変（チェンジ）われば人に大きな感化を与えるような素晴らしい人間味をもった男だった。結末からさきにいえば、後に彼はわたしと一緒にイギリスへ行き、オックスフォードで開かれたＭＲＡの集会に出席した。またわたしと一緒に国際連盟へも行った。

もう少し詳しくその経過を話してみたい。というのは、こういうことをするのが諸君の仕事なのだから。そしてわたしがこの経験から多く学んだように、諸君もまたこれから有益な示唆を汲みとってほしいと思う。この州立大学でわたしが学んだことが、今われわれのやっていることの基礎となったのである。

第二の男は、みるからに立派な人好きのする大学院の学生である。彼は、わたしが今までに会った最も愉快な人間の一人だったといっていい。彼の父は最高裁判所の判事であり、祖父は州知事であった。名前はBという。いま、彼はイギリスにいる。この冬はロンドンで過ごし、わたしの家にも訪れた。昨年はコーへも行った。

われわれは友だちになった。彼は南部の生まれであった。すべての南部人と同じように、朝食に鶏のからあげとビスケットが好きだった。ところで、わたしには、メリーという実に上手な料理人がいた。彼女はすばらしい人だった。彼女と二人の息子とが変わった話は、またの機会にするが、それもまた、一つの奇蹟であった。

さて、Bは乗馬が好きだったので、わたしたちはよく一緒に乗りまわした。彼は何気ない態度をもって、その実、細心の注意をはらってつきあわなければならないたち

の人間だということを知っていたので、だから心の深い問題については、一度も彼に話さなかった。いつも、ありとあらゆる世間話をしあった。このようなやり方を、諸君は学ばなければならない。Bはだんだん興味をもつようになり、わたしの周囲の雰囲気にとけこんで来た。

ある日、彼はいった。「クラブへ馬で行きましょう」忘れもしない、その日は電線に雨が凍りつく、みぞれ模様の日だった。私は思った。「クラブへ馬だって。気が変になったんじゃあないかな、この男は」馬の脚が気遣われた。雪が積っていた。冬であった。

わたしたちは馬で十五哩、クラブについて、とにかく、くつろいでうまい夕食をとった。わたしは、骨の髄まで寒さが沁みこんでいたので、コーヒーを何杯も飲んだ。そして床についた。

この夜はコーヒーのおかげで眠れなかった。十時、十一時、十二時、一時と時計が時を打つのが聞えた。とうとう二時を打ったとき、彼は突然わたしに話しかけた。

「もう眠りましたか」

「いや、君は」
「眠れないんですよ。少し話しませんか」
「そうね、何を話そうか」
「あなたの信仰について、少し話してくれませんか」
そこで、わたしは話した。わたしたちは数時間も話しあった。彼は儒教を信じているといった。
最後に、わたしは彼に孔子の話をしてくれとたのんだ。彼は孔子について、あまり詳しく知らないようだった。そこで、わたしは、孔子の墓に詣でたときのこと、孔子の七十六代目の後裔が茶を振舞ってくれたこと、またある寒い日に、四枚外套を重ね着していた七十七代目の子孫にも会ったことなどを話してきかせた。
そこで、わたしは彼にいった。「わたしの知り合いで鶏泥棒をやっているものがいるんだが、彼とその細君と五人の子供に儒教の力で、まともになれるかどうか、ためして見たらどうだろう」
Bは同意した。それから二、三ヵ月間、彼は鶏泥棒の妻に金をあたえて家計を助

け、子供たちにおいしいものを買わせた。またその泥棒とも話しあった。しかし、どうしたことか、大して成功しなかった。鶏泥棒は間もなく捕えられた。彼は、スポンジにクロロフォルムを浸し、それを鶏のくちばしに押しつけて、気を失ったところを運び出していたのだ。おなじ仕事をしていた息子の一人は刑務所にいった。Bは家族と共に努力し、できるだけのことをしてやり、ほんとうの儒教徒のようにふるまおうと努めた。

が、とうとう彼はわたしのところへ、まったく絶望して現われた。

「もうだめだ。やればやるほど、彼らは欲しがるんです」

Bは大切なことを学んでいたのだ。彼は、変わるということを、度外視して社会保障によってすべての問題を解決しようとしていた。つまり、根本の原因に触れずに表面に表われた条件だけを考えていたのである。

Bは今は何でもやってみる気になっていた。

「フランク、あなたならどうします。神に祈りますか」と彼はいった。

そこで、わたしは、すでに監獄にいる鶏泥棒にはきめがなかったから、ビル・ピ

ックルのために祈ろうと提案した。Bはすぐ賛成した。

「君が祈りなさい」とわたしはいった。こういうときにはできれば自分でなく相手に祈らせるのがよい。

Bは祈った。「神様。もし神様などというものがあるなら、どうぞわれわれを助けて、ビル・ピックル、ピックルの細君、ピックルの子供たち全部を変えて下さい。アーメン」

こんなのはまともな祈りでないという人がいるかもしれないが、この祈りはすぐかなえられた。

翌日、ビルは、自分が監督をしている野球チームに試合をさせていた。その夕方、Bとわたしは、田舎に美しい家をもっている友人を訪問するためにでかけた。この友人はスイスのコーの対岸のオート・サヴォア出の気持のよいフランス人の一家で、その晩そこへワシントンの中国公使がくることになっていた。そこで投なわで牛をとらえるのを中国公使に見せようという趣向であった。中国公使も、それが気に入るだろうと思ったのだ。わたしたちが町を通っていくと、突然Bがわたしにいった。「ビル

がいますよ」ビルは、彼のチームが勝ったので、その祝酒をのんで、もうたれかれの見境もなくけんかをふっかけていた。

正直にいって、わたしはビルに会うことには気が進まなかったが、Bはいった。「われわれは、彼のために祈っていたのじゃないですか。今こそ、何かするべきときですよ」

ビルが近づいて来た。諸君も御承知のように、わたしの鼻は大きい。「もし鼻をぶんなぐられたら……」と思った。このような場合には、いったいどうするかと、あるとき中国人の友人に訊ねたら、「すきをみて近よることです」とおしえてくれたことがあった。

そこで、わたしはビルに近よって、機先を制して、そのきき腕をおさえた。彼がなぐろうとしても、それほどひどくなぐられないように。しかし、次にどうすればよいのだ。瞬間、心にひらめいた。「自分のもっている一番深いものをあたえるべきだ」

「ビル」とわたしはいった。「われわれは君のために祈っていたのだよ」

おどろいたことには、ビルの闘志はすっかり鈍ってしまった。彼の眼には涙がにじ

みでた。そして教会の塔を指さした。「あそこの教会が見えるだろう。おれは教会の土台石がすえられたとき、あの場所にいた。おれの一セント銅貨が一つ、あの下にうまっているんだ」

わたしはいった。「ビル、君のお母さんはきっと善い人だったんだろう」

「おふくろは、すばらしい女だ」

わたしはBを紹介した。「この人も君のために祈っていたんだ」

「それは御親切に」と彼はいった。「よい方だ」そしてつづけた。「いつか遊びにきませんか」

わたしはいった。「行きましょう。だが、いつかでは、はっきりしないから、時間をきめてくれないか」

「こんどの木曜日の夜七時にきて下さい」

こういう大切なことをするのには時間がかち合うことは決してないものである。中国公使に会いに行く途中に、ビルに会う時間があったわけだ。Bと時間をすごすこともできた。しかも、次の木曜日の夜七時にビルと会うこともきまった。

そこで、次の木曜日、わたしたちは、誰か飄軽者(ひょうきんもの)が「ハインズ・ハイツ」(ハインズは有名な漬ものの会社である)と名付けた丘の、ペンキも塗っていないピックルの家を訪ねたのである。それは実に面白い経験であった。あらゆるところからのぞき見されているような感じがしたが、人っ子一人見えなかった。ビルは、すでに隣り近所に、わたしのくることを話してあった。彼は、自分を変えるために、われわれがやってくるのだろうと想像していたのだ。その通りだったのだが、彼の予期していたようなやり方はしなかった。彼は週に一度しか顔をそらないのに、この大切な日にそなえて、さっぱりとそっていた。

わたしたちは、野球やフット・ボールのことを話しあった。もちろん、彼はすべてのスポーツ通だった。馬についても知らないことはなかった。また、大学生活のうら話まで話しあった。帰る時間になった。

「あんたがたがお出なすって面白かった」とビルはいった。つまり彼は、どの知り合いたちにもわたしたちによって変えられなかったと言えるのが嬉しかったのだ。しかし、そんな話し合いでも祈りに基づいているときには、おどろくべき結果が生まれ

るものである。ビルはわたしたちの傍にいたがるようになった。わたしたちの友人になり、その友情が欲しくなったのだ。

数日後、馬術大会が開かれた。彼はBとつれだって馬を見に行った。その日の午後は、ずっと馬のことばかり話したのだが、ビルはこんな楽しい時間をすごしたことははじめてだと洩らした。

もちろん、このことはBに大きな影響を与えた。彼はもう「もし神様なんてあるものなら……」などとはいわなくなった。「神が存在することは間違いのない事実だ。いつもわれわれの祈りに答えてくれるではないか」というのである。彼は、ますます強く、われわれの仲間の一人だと感ずるようになった。

彼はいった。「ぼくには分らないことだらけだ。聖書や祈りについて、何も知らない。また、どうして人の心をかちうるのかも分らない」

それでわたしはいった。「この夏一緒にすごしてみようじゃあないか」

われわれは西部へさして出発した。毎日毎日、聖書の真理や祈りについて学び、ごく自然のうちにすべてのことを話しあったので、おたがいの間に何のわけへだてもな

いようになった。そういうふうに夏をすごしたのである。当時はたった一人の人間におこったことだが、今では五千人、一万人の人びとにおこっている。この州立大学は、わたしがこのようなことを初めて学んだ実験室であったのだ。

わたしは、この大学でもう一つのことを学んだ。ビルがお酒を学生たちに売るときっと晩には何人かが酔ってかつぎだされることがしばしばあった。学生たちの中には酒のために一生を台なしにしてしまった人もいた。そんなときに、ただ一つよりどころとなるものは常に自分を愛し、その生活を一変させてくれることのできる人がいるのだという事実である。このような力をもった人のところには、夜となく、昼となくあらゆる種類の人びとが答えをもとめてくるだろう。

田舎に住んでいた例のフランス人の一家は、屋敷のなかにカトリックの教会をもっていて、立派なアイルランド人の牧師が住んでいた。彼はまた、学生集会の牧師でもあった。彼は大学で何かが起りはじめていることに気づいた。わたしたちのところに、たくさんの人が集まってきた。その多くが彼のカトリック教会へ行きはじめた。なかには教会に反抗していた人たちもあったが、わたしたちが手がけた結果、信仰の

体験を得て教会に帰って行くようになった。この大学には、カトリックとプロテスタントとの問題もなく、この牧師もわたしたちの仕事に大賛成であった。そしてよくわたしたちのところへ来て、いったいどうして人を変えるかが知りたいといっていた。

これはすべての人が求めている秘訣であり、そして極めて大切なことである。また、必ず学ぶ必要のあるものだ。子供たちの将来のために、これを学ばねばならない。子供たちがあなたのところへ行き、自分のことについて話すようでなければならないし、あなたもまた、自分のことを卒直に話せるようでなければならない。こうして子供たちの心をかちうるのであり、今日ここにたくさんの若い人たちが集まっているのもそのためなのである。青年は、自分を理解してくれる人、善良ぶったり、利口ぶったりせず、自分について正直な人のところにいくものである。思ったままを話してくれる人のところへ引きつけられていくのだ。

この大学でもう一つ学んだことがある。あまりにたくさんの人が電話をかけてくるので、わたしは部屋に二つの電話が必要であった。ところがわたしはもう一つの電話

をもっていた。それは生きた神からのメッセージを伝えてくるものであった。神はわたしにすべきことを命じ、わたしはそれらを紙に書きつけた。何も書かなければならないというのではないが、わたしの記憶は、あまりにもあいまいだからである。まるで篩のようで何でもぬけて忘れてしまうので書きとめることにした。もしあなたの記憶が非常に確かで写真のように写しとめておくことができるのならそれは立派なものだが、わたしは物おぼえのわるい人間で、書いておかなければならない。イザヤは次のようにいっている。「神は疲れはてた者に語りかけるために正しい言葉をあたえてくれ、朝ごとにわたしを醒まし、神の言葉を聴かしてくれる」ずっと前のことだが、わたしとまったく同じように、神が語ることを書きつけていた牧師がいたようだ。中国では、最も強い記憶力でも最も薄い墨よりも弱いということわざがある。

わたしはニューヨーク経由で、Bと一緒に旅行から帰ってきた。ニューヨークでわたしは、冬支度のために真新しいビーバーの毛皮帽をちょっと金をはずんで買ったのだが、州立大学に帰った晩に、それを被った。わたしたちが町を歩いていたら、他ならぬビルに会った。ビルはいっぱしの役者だった。わたしの帽子をしげしげと眺め、

黙ったまま感に堪えぬようにわたしのまわりをまわった。握手もせず、「元気かね」とさえいわなかった。

彼はいった。「ねえ、その帽子をくれたら、おれはあんたのために何でもするんだがな」

わたしはいった。「ビル、この帽子は上げるが、ただ一つ条件がある。それは、わたしと一緒にカナダのトロントの学生大会へ行くことだ」

彼はいった。「行ってもいい。ともかく、あしたの朝、会おう」そして彼はそのビーバー帽を被って行ってしまった。

朝になった。ビルは玄関に立っていた。

「行けないんだ」彼は口ひげをふるわせながらいった。「かばんがないのだ」

ビルは「イエス」というところを「ノー」という種類の人間だった。そんな人間はまだたくさんいる。

「心配無用だよ。何か探してあげよう」

「いや」とビルはいった。「家に何かがあるだろう」

ここで、わたしはビルとB以外の第三の男にふれねばならない。この男は大学が変わるために不可欠の人間だったのだ。それは無神論者の学長であった。彼は誰からも好かれていた。評判がよく、人づきあいもよく、魅力的で、男らしい人だったが、ただ無神論者なのだ。しかし、彼の妻は信心深い人だった。こんな夫婦もここにいるだろうと思う。奥さんは一生懸命がまんしているが扱いにくい夫で困っていることだろう。お金の使い方や、税金についても、彼らなりの考えをもっていて、自分の満足や安楽のために物事をはこぶのは、実に堂に入ったものだが、女性の立場からは必ずしも満足できるものではない。この学長は、わたしがビルをトロントへ誘ったことを知った。ビルの娘が、学長の家の女中だったからだ。そのビルの娘が学長夫人に話し、夫人が学長に話したので、彼はわたしに会いにきたのである。

「ビル・ピックルをトロントへ連れて行くそうだね」

「ええ」とわたしは、彼がどう考えているか分らないままに答えた。わたしは、ただの馬鹿扱いされるのかと思った。

しかし、学長はつづけた。「君、このことから奇蹟がおこるだろう。長い間、ぼく

はビルのために、誰かが何かをするだろうと思っていたが、君がその人らしい」

わたしはいった。「いいえ。これはわたしのやるべき仕事ではないのです。神がやっている仕事ですよ」

「ぼくにも一役買わせてもらいたい」と学長はいった。「ビルの旅行の費用をぼくに出させてくれないか」

そこで、ビル・ピックルとわたしは、十七人の学生と一緒にトロントへ出発した。あの小さい駅を出発する朝の様子が、今でも眼に浮かぶようだ。ビルは、例のビーバー帽を被り、ゲートルをつけ、襟飾りをしていた。まるでむく犬の脚を連想させた。手には、表がすり切れた小さな模造のわに皮の鞄を持っていた。

いったい、どんな理由でビルはその旅行に出かけたのだろう。実は五つの理由があった。彼は、(イ)旅行をしたかった。(ロ)トロントの酒はうまいと聞いていた。(ハ)友情が欲しかった。(ニ)トロントがどういう所か見たかった。そして五番目は、トロントへ着くまで、わたしには分らなかったのだが、わたしが、その帽子に似合う毛皮の外套を買ってくれるだろうと思っていたのだ。

汽車のなかで、わたしが食事にしようというと、なぜかビルは反対した。最初の乗換駅で、酒をどうやって手に入れようかと企んでいたのだ。彼は一行十七人のなかに、彼がいつも酒を売りつけていた学生が一人いるのに気がついた。その学生はぼんくらというあだ名で、もとは大酒呑みであったが、今では大学内で正しいことのために闘っている男だった。その乗換駅で、食堂らしい扉に向って行くぼんくらの後に、ビルがついて行った。なかは食堂ではなく、バーであった。

「おい、ビル」とぼんくらはいった。「ここはおれたちのくるところじゃあない」

ビルは文句をいったが、ぼんくらは譲らなかった。ビルに新しい生活の基礎がつくられたのは、ビルがあとでいったように、このときに彼が譲らなかったからなのである。彼らは食堂に入った。わたしが、食堂へ行くと、ビルはおとなしくすわって定食をとっていた。

次の乗換駅では、ビルは酒の売場を知っていたが、そのときには、みんなが彼に注目しているように感じた。諸君も、そんな感じをしたことがないだろうか。みんな、あなたを見詰めているような感じがする。その実、誰もあなたに注意はしていない。

それがあなたの良心というものなのだ。次の食事は汽車のなかだった。ビルとわたしは二人だけの場所を取った。これも運命論者だった、無神論者だったある男が食事の感謝の祈りを捧げた。こういう人が変わるとき、すばらしいことをするものである。わたしにはそんなことができなかったろう。すると、ビルが突然口をだした。「あいつのおかげで、飯がまずくなってしまった」最初わたしは、彼に食事を運んだ黒人の給仕のことをいっているのかと思ったが、ビルはいった。「あいつは、神様に飯の感謝をした。おれのおふくろも、よくやっていたもんだが、まだそれをやる人間がいるとは恐れ入った。おれたちは神様なんかに礼をいうものか」

さてナイヤガラ瀑布に着くと、彼にとって、とんでもないことがもちあがった。というのは、その夜、禁酒ホテルに泊ることになっていたのだ。わたしが取計らったわけではなかった。彼は、大地に根が生えたように、絶対に禁酒ホテルには泊らないと言い張った。彼には、いったいどうして、ホテルが酒場なしでやっていけるかが考えられなかったのだ。またもし、彼の仲間が、彼が禁酒ホテルに泊ったと聞いたらなんというだろう。

「そんな詰らないことでくよくよするなよ」とわたしはいった。「二階へ行って休もう」わたしは風呂をすすめた。

「風呂だって?」ビルはいって、海象のような口ひげ越しに、わたしの方をジロリとにらんだ。「風邪をひいて死ねとでもいうのかい」

「とんでもない、ビル」わたしはいった。

「あんたは知らないんだね」と彼はつづけた。「おれのくにでは十一月になると、寒くないように下着を袋のように縫いつけて、三月までほどかないのを知らないのか」風呂はむりにすすめなかった。彼は真赤なフランネルの下着の上に、ねまきを着た。間のわるいことに、彼は折りたたみの寝台に寝ることになっていた。多少危ぶんだ様子だったが、結局それにもぐり込んでいった。

わたしは、また部屋へ戻っていった。「ビル、何か忘れたようだ。祈るのをね」

「おれにはそんなことはできないよ」

「手伝ってあげよう」

ビルはのろのろと寝台をはい出し、両膝をついた。

「あんたからはじめろよ」
「天にいます」とわたしははじめた。
「天にいます」とビルはいった。
「われらの父よ」
「われらの父よ」
突然ビルはいった。「それなら、昔知っていたよ」
「もちろん知っていただろう。たくさんの人が、こういうふうにみんな祈るんだ」
ビルはいった。「あんたがつづければ、おれは後からついていく」
このように主の祈りをすませた。そして床についた。
翌朝、わたしは駅の構内で実にびっくりした。ほかでもない、Bの荷物にべたべたと「ナイヤガラ瀑布禁酒ホテル」のラベルが貼ってあったのだ。把手には五枚もつけてあった。Bはわたしを責めた。わたしは「わたしじゃない」といった。ビルはシラをきっていたが、後になって白状した。ビルはこうして学生たちにいたずらができるほど、学生のなかでらくな気持になったわけだ。ビルと彼らをへだてていた壁がすっ

かり取り払われた。ビルは後で、あの旅行中つかった金は、あのラベル代だけだったとよく話していた。「給仕に二十五セント出して、あれを貼らしたんだ」

わたしたちはトロントのホテルに落ち着いた。わたしは午後の大会に行くことを提案した。州知事が司会し、六千人の人が参会することになっていた。

「いやだ」とビルはいった。

「じゃあ、これから何をするつもりだね」

「カナダはアメリカよりも毛皮が安いそうだ」とビルはいった。「外へ出て、毛皮の外套を探したいんだ」

「それは良い考えだ、ビル。けれども、わたしたちはまず大会に行かなければならんと思うねえ」

「行ってもいいが、一つ条件がある」と彼はいった。「おれと一緒にうしろの席に坐ってくれれば行くよ」

大会で二番目に話したのは黒人だったが、ビルはそれに興味をひかれた。彼はいった。「あいつ、ずいぶん黒いな。炭を塗っても白くあとがつくだろう」

その男は、養い親と養い子と養い孫の物語を一つしたが、その養い孫が養い親との関係を断ってしまった話だった。ビルは終始うなずいたり、あるいは激しく首を振ったりしていた。一言一句が彼を打ったのだ。なぜなら、それは彼の家庭の物語と同じであったからだ。ビルはわたしと大会場を出るといった。

「フランク、あんたは、あの男におれのことを話したのか?」

「話すものか、ビル」

わたしたちは小さい居間に戻って、十九人で集まりをした。ビルはわたしにいった。「少し話したいことがあるんだが」

「さあ話すがいい」まるで大砲の弾が打ち出されるように、彼は急に立ち上った。

「おれは六十二の老人だが、生活を変える決心をした。おれには孫があるが、あの養子のように、じいさんに反抗するようなことを見るのはかなわない。生まれてこの方、おれは天の父に従わなかった。これからこの老人はいままでとは違った人間になるつもりだ」

そして、わたしを手招きしながら部屋をでた。「フランク、ちょっとすわって、ば

あさんに手紙を書いてほしいんだ」と彼はいった。

そのばあさんというのがピックル夫人だ。すばらしい細君だった。純金のような心の持主で、また料理もすばらしく上手だった。その後間もなく、わたしたちは家路についた。ぼんくらが正しい扉をくぐった例の駅についた。ビルが変わったというニュースはいち早く伝わっていた。ちょうど汽車を降りようとしていたときだ。ビルはまだステップに足をかけたままで、わたしはそのすぐ後にいたが、酒を持ってきていた一団があった。ビルの親友たちは、何が起こったかを聞き、最上の酒を二瓶持ってきたのだ。どんなことが起ろうとも、是非ビルを酔わせて帰そうというのだ。最初の瓶をビルに渡したところ、彼はそれをとってわざと指をすべらし煉瓦のゆかの上におとした。次のは、もっとこみ入った方法だった。第二の瓶のコルクを抜きとり、ビルの鼻の下で匂いをかがせたのである。ビルが素早く、その男の手首をかるく叩いたので瓶はまた下に落ちた。

わたしはほしいときにはいつでも酒をのめる環境に育った。しかしビル・ピックルのような男のためにわたしは一滴の酒も口にしない。カクテル一杯でも口にしたらあ

あいう男をかちとることはできない。酒を飲むことが悪いなどといっているのではない。誰でも正しいと思うことをやるがよい。しかしわたしはビルのような男のことを考えずにはいられない。

これはタバコについても同じことがいえる。わたしはタバコはやらないが、別にタバコを吸うことがわるいとはいわない。その頃のビルはニコチン中毒だった。ところが不思議なことに彼が変わったとき、それらがいらなくなってしまった。わたしが何もいわないのに酒もタバコもやめてしまった。元来これは小さな悪習ともいうべきもので、わたしはこれを罪とはいわないが、それにもかかわらず、これが全生涯の鍵となっていることは驚くべきだ。

ビルは町の話題となったが、誰もがそれについて好意をもったわけではなかった。ある牧師は、わたしにビルを自分の教会におくらないでくれと申し入れた。

「心配しないで下さい」とわたしはいった。「彼は自分が役割をもち、必要なときには口答えもできるような教会が好きなのです」

次の月曜日、ビルがやって来た。

「聞いたかね？」彼はいった。「教会に入れてくれないんだ」
わたしはまるで短刀でグサリとやられたように感じた。ビルにはたえられないだろうと思った。
「ビル、心配するなよ」とわたしはいった。「わたしたちの教会をもとう」
ビルはいった。「これは不思議だ。おれもそう考えていたんだ」
結局、教会は持たなかったが、ビルをよく知っている、仲間の小使が十九人もいたので土曜の夜、われわれは会合した。
ビルはいった。「おれたちみんなは、あんたに来てもらって話してほしいんだ」
「さあ、わたしがいってもいいのかね、わたしに一体何を話せというんだね」ビルは例の口ひげをふるわせていった。「使徒信条について話してくれないか」わたしは「使徒信条だって！」と内心思ったが、とにかく賛成した。
毎週土曜日の夜、わたしたちは会合した。彼らは常にそこに集まってきた。決して集まるために強要したことはなかった。わたしたちがキリストが「陰府（よみ）（地獄）にくだり……」という章句にぶっつかったとき、ビルはいった。「そこだ、それがおれに

は分らないんだ。そこはキリストの行く場所じゃあない」
解答を求めて、わたしたちはしばらく考えた。
ついにビルはいった。「わかった。きっとキリストは地獄を掃除にいったんだ。次にうつろう」
それ以来、大学内でのビルの影響力は現代の奇蹟であった。卒業生たちが毎年の卒業式に集まってきても、酔っぱらわなくなった。ビルは皆から客として呼ばれたが、酒の出るパーティに顔出しをすることは断固として断わった。みんなはこの愉快な人物をパーティに招きたかったので、酒なしのパーティにした。ビルは全くパーティの花形で、古い話をおもしろく、しかも全く新しく話すのであった。三年後にはもはや酒のパーティを開くなんてことは、はやらないようになった。大学は試合に勝ち始め、学生の成績もあがった。ジョン・モット博士が来校し、また世界の各地から神のなしたこの偉大な働きを見にきたのである。
学長は実にすばらしい人になった。彼がいつも求めていながら、それが現実に存在していると信じ切れなかったもの、それらがたしかに生きた現実として人びとの生活

のなかに起りうるということをビルによって知った。ビル自身の生活のなかに、また彼の家の女中であるビルの娘にその奇蹟が起ったのを見た。ビルの全家族のチェンジを、また大学生活のなかに真の活動力となって育っていくのを見たのである。

しかし、こういったすべてについて、わたしのしたただ一つのことは、神にわたしを使わせたということでしかなかった。

ビルは今から十年前に埋葬された。それはちょうど、MRAのアメリカにおける発足を記念する大会が、ワシントンの憲法会館で開かれた直後であった。

世界中の政治家や指導者が、MRAのみが、人類にとってのただ一つの希望であるとして歓呼をもって、迎えたのである。ビルの葬儀は彼の生涯にふさわしいものだった。

神よ恵みを与え給え
彼らの後に続くために

ビルやピックル夫人、そしてその子供たちに続いていけるために。

結局、結論として、この世には二つの階級しかない。それは変わった人と、変わら

ない人との二つである。真の民主主義のイデオロギーをあたえてくれるのは変わった人なのだ。

「みよ、兄弟互いに愛し合うのを」

終りに詩の言葉をのべよう。

神よ　永年にわたる冷たい心を
許したまえ
静寂の中に私は祈る
臆ずる心と怖れの心をくじき
心の火を燃やしたまえ

私はきわめて小さい存在ではあるが
神を信じ受入れ敬愛する
愛の火よ　心の中に燃えさかれ

神を求めて　すべての情熱をかたむけつくすまで

人の魂に対する燃える情熱を
与えたまえ
死にいたるまで愛することと
ひたむきな慈悲の心を
心に常に燃えつづける火を

純粋の祈りの力を与えたまえ
失われた人々にそそがれるように
無私の祈りは
神の力があふれている

あとがき

科学の発達は、日一日と私たちを新しい未知の世界につれ去っていく。一方では無限の可能性と無限の希望とが約束されているのに、他方では人間同士が自ら作りだしている問題のために全人類を破滅の危機に追い込んでいる。この矛盾に対して解答を見出さねばならない。

政治形体がちがい、宗教がことなり、経済環境がことなっても、人間社会に共通するものが一つある。それは人間性そのものである。その人間性をいかに取扱い、いかに処理するかを学ばない限り解答は得られないのである。

最近、ソ連のコムソモロスカヤ・プラウダ紙が青少年問題をとりあげ、若い世代の人たちに革命的情熱が欠けていることを指摘した記事の中に次のようなことが書かれている。

「人間自体に変らなければならない要素が多い。自己満足、権力欲にうちかち、終

局において人間性にひそむ利己心を征服し根絶する道を発見しなくてはならない」

この本は今日、東西両陣営に属するすべての人が求めている人づくり、国づくりの根本課題をとりあげて、くわしく解明している。しかも単なる理論をのべているのではなく、世界的規模で、実際に経験したことにもとづいて書かれたものである。

著者の一人ポール・キャンベル博士はカナダ人医師でヘンリー・フォード病院のスタッフで過去二十年にわたってブックマン博士の主治医をつとめていた。またピーター・ハワード氏は英国の政治評論家としてまた劇作家としても著名で彼の著作は十二ヵ国語に翻訳され現在までに四百万部以上売りつくされている。

本書が現代におけるあらゆる人々の必読の書であることを確信してやまない。

一九六三年十月一日

訳　者

訳者紹介

相馬雪香　尾崎雪堂の三女として1912年東京に生る。女子学習院卒業後，英国に学ぶ。現在尾崎記念財団常務理事。
訳書にフランク・ブックマン『世界を再造する』ピーター・ハワード『フランク・ブックマンの秘訣』などがある。

人間の改造　〈検印省略〉

昭和37年10月20日　印刷
昭和37年10月25日　発行　　¥ 200

著者　ポール・キャンベル
　　ピーター・ハワード
訳者　相馬雪香
発行者　高木金之助
印刷所　中央精版印刷株式会社

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町一の一一
大阪市北区堂島上二の三六
門司市清滝町一の九〇二
名古屋市中村区畑内町四の一

© 1962, Yukika Sōma　Printed in Japan

毎日新聞社

¥200